第一章 序論

第一節　はじめに　－「モンゴル・オルス」という視座

ロシアの著名なモンゴル学者ウラジミルツォフが「暗黒の時代」と名付けた時代は、1368 年に明朝によってモンゴルの征服王朝が滅ぼされ、大元オルス皇室が中国を追われモンゴリアの本土に引き上げてから 17 世紀にいたるまでの 2 世紀近い歴史を指す（ウラジミルツォフ 1929)。この「暗黒の時代」と呼ばれる時代を、ドイツのモンゴル学創設者ワルター・ハイシッヒ（1913－2005）は、「草原の民と農耕の国中国両者の間の対決の昔ながらのリズムに乗って、彼らはこの何世紀もの間を通じての唯一の歴史的業績として、中国国境をおそっては不安におびやかし、掠奪品で腹いっぱいになって引き上げるのだった」(ハイシッヒ 1967、p58）と指摘した。一方、日本の東洋学者和田清（1890－1963）は、その時代に、明軍の攻撃にさらされ、「窮荒に奔走して、年と共に支那風の文化を失掉したので、後には漸く蒙古本来の陋俗に返」ったと指摘している（和田清 1959、p835）。東西の学者は、草原に帰ったモンゴルを「国家」を失った原始的な民として描き出している。また、内モンゴルの研究者王風雷(モンゴル名ボヤンヘシグ　)は、モンゴル教育通史を執筆した際に、この 2 世紀について一文字も書いていない(『教育』内蒙古教育出版社、2003 年)。

しかし、この「暗黒の時代」と呼ばれた 2 世紀は、チンギス・ハーンが作り上げた「帝国としてのモンゴル」が解体し、「民族としてのモンゴル」に変化していった時代であった。それは「新たなモンゴル民族形成」(宮脇淳子　2002)の時代であったのだ。

これまで、14、15 世紀のモンゴルに関する歴史記録は非常に乏しく、研究者たちを悩ませてきた。ただ、「四部の編年史」と呼ばれる歴史記録は存在した。しかし、チ

ンギス・ハーン一族の起源を、チベット、インドと遡り神話・伝説として説き起こすその記述スタイルは、所謂実証的な歴史研究の立場からは評価されず、たとえば、ウラジミルツォフは「良い資料を用ひずに、（仏教思想の影響を受けた）悪い西蔵の資料を重用して、チンギス・ハン（ママ）伝関係の資料を取捨し、当時の叙事詩的伝説に迎合して、年代記を混乱させた」と批判している（ウラジミルツォフ1941、p35）。

乏しい「歴史記録」とは、あくまで文字文化に限る歴史の伝わり方を指しており、草原の語り部たちが胡弓を背負って、草原の隅々を放浪しながら伝える「黄金家族」の英雄物語はそこから除外されてしまうのである。これらの「声の歴史」は、ウラジミルツォフが「叙事詩的伝説に迎合して年代記を混乱させた」と批判するところであるが、本論があえてこの年代記を混乱させた「叙事詩的伝説に迎合し」たところに注目したいのである。草原の「声の歴史」の伝統は、17 世紀の編年史に大きく影響し、編年史の著者たちはこれらの「声の歴史」を大量に取り入れた。草原を絶えず移動する「行国」においては、「声の歴史」こそが、歴史をより十全に伝えるかたちだったのであり、またそれはモンゴル・アイデンティティを表象し得るものであり、編年史の著者たちにとって欠くことのできないものであったのだ。

17 世紀には、四部の編年史を含め、『アルタン・ハーン伝』[1]、『アサラクチ史』[2]などをはじめ多くの歴史書が編纂されたが、それらの一つである『シャラ・トージ』（後で詳述）の序言には、ダライ・ラマ五世の教えとして、著者が『シャラ・トージ』を著した主旨を伝える次のような記述がある。

《（74）》

ダライ・ラマのお説きになったジャラグスン・フリムという歴史書には、総じて人は自分の根源を知らなければ森に迷った猿に等しく、自分の氏を知らなければ、玉石に刻まれた偽竜のごとくで、祖先の教訓典籍を読まなければ、（親に）捨てられた子供のごとくであるとある（『シャラ・トージ』p74）。

『シャラ・トージ』を含む四部の編年史には、著者たちの民族的アイデンティティの強い表われが確認できる。

しかし、「暗黒の時代」、「空白の 200 年」という言葉に象徴されるように、モンゴル史研究の分野において、この時代に関する研究は非常に少ない。デイヴィド・モーガンはその著書『モンゴル帝国の歴史』において、14、15 世紀の歴史をせいぜい 1000 字で括ったほどである。

このように 14、15 世紀のこの時代が「明代蒙古」、「北元」として名づけられ、中国史の付随的分野として処理されてしまうことが多いのも、資料不足という現実によるものである。しかし、本研究が扱う『蒙古源流』、『シャラ・トージ』、『蒙古黄金史』、『アルタン・トブチ』の四部の編年史の存在は、こうした歴史認識を見直す手掛かりではないかと考えられる。

四部の編年史をはじめとして、17 世紀以降の編年史には共通の特徴として、チンギス・ハーンの「黄金家族」の起源をインドの古代帝王までさかのぼって述べていることがある。つまり、チンギス・ハーンの「黄金家族」は、ブッダの後裔であるというロジックである。四部の編年史はそろってこのような論じ方をとっており、17 世紀以降に書かれたモンゴルの歴史書はこの書き方を受け継ぎ、モンゴル歴史古典の一つの特徴となっている。これは、四部の編年史に著者たちの強い民族的意識がもり込まれているということである。

編年史の著者たちは、モンゴル民族アイデンティティの形成のうえで、シャーマニズムによる祖先崇拝としての「チンギス・ハーン祭祀」による統合力に満足せず、チンギス・ハーンの「黄金家族」をブッダと繋ぐことによる、「黄金家族」

が仏教と重なり合った二重の構造を編み出すことで更なる求心力を促した。

本論文では、四部の編年史に表われた「黄金家族」と仏教が重なりあった二重の構造がいかに形成されたか。その背景、原因、目的はどのようなものであったかという問題を解明していきたい。そしてこの問題を解明することを通して、「明代蒙古」、「北元時代」と呼ばれる時期のモンゴル民族の歴史を再考したいと思う。

本論における一つの重要な試みとして、「モンゴル・オルス」という重要な視座を導入することによって、従来の「明代蒙古」、「北元時代」という中国を軸にした研究で埋もれがちであった歴史のアクターである「モンゴル」の主体性に迫ることがある。

モンゴルの歴史において、1368-1636 年における 280 年あまりの歴史は上述のように中国歴史における周辺事情としての「北元」、「明代蒙古」、または「蒙古の陋俗」への回帰としての「暗黒の時代」として論じられてきた。このような論述は二つの問題を内包している。その一つは、歴史的主体としてのモンゴルの存在を抹消したこと、もう一つは、定住社会からみた遊牧社会に関する歴史記述を無批判に受け入れ、それに基づいた認識視点、つまり定住社会による中央アジア遊牧社会に対するオリエンタリズム的な認識である。

この「暗黒の時代」におけるモンゴルの真相解明には、周辺社会による歴史記録は欠かせない史料であるが、しかし、モンゴル社会における精神体系に取って代わることは不可能である。この精神体系を理解する上で、モンゴルの歴史家たちが残した歴史記録は重要な位置を占める。そのため、本論では 17 世紀に書かれた編年史のなかで四部の黄金史の存在に注目したのである。これらの四部の編年史は、遊牧社会の歴史家が記述した遊牧社会の歴史である。これらの歴史書に表われた「黄金家族」を中心とした国家統合を主張する意識は、中国、ペルシア、中央アジアというモンゴル帝国の広範な領土と人民が徐々に失われていくプロセ

スで形成されたといえる。この喪失感は四部の編年史のなかにはっきりと表れており、モンゴルの新たな民族起源神話を生みだした。つまり、四部の編年史が「九種の言葉をもつ人々」あるいは「五色四夷」という言葉で表現した多種多様な民族と国々が大モンゴル帝国を構成しており、これらの民族と国々との相関関係から生まれたのが新しいモンゴル民族なのである。

そのため、モンゴルの民族形成史において、「モンゴル・オルス」時代は非常に重要な位置を占める時期である。この時期を「北元」、「明代蒙古」という形で、中国史の周辺問題として処理してしまうことによって、大元オルス崩壊後にモンゴルが新たな民族として再形成されるプロセスが見えなくなる。1200 年あまりの伝統をもつ歴史編纂技術によって完成された『元史』からは、大モンゴル帝国の後継者としての大元オルスと他の諸カン国との間のつながりが見えない。『元史』列伝における「外夷」の項にも、日本、高麗、安南などの進貢する国々だけが記録されている。『元史』が提供する歴史観点に限っては、大元オルスは完全に「中華」の王朝としてしか見られず、そのためモンゴル・オルス時代が中華王朝としての大元オルスの付随的問題として処理されがちである。これらの研究では「北元」、「明代蒙古」という視点が一般的に使われてきた。

そのため、17 世紀にモンゴルの歴史家たちが書いた編年史の存在は、モンゴル･オルス時代の新たな民族形成プロセスを探究するうえでの重要な資料となる。本論では、「黄金史」と呼ばれる編年史に表われた「黄金家族」と仏教が重なり合った民族アイデンティティに注目を置く。しかし、本論が課題としているのは、四部の編年史に表われた「黄金家族」と仏教が重なり合った重層構造をもつアイデンティティの形成過程の解明であり、モンゴル民族形成を通史的に叙述するのは不可能である。

以上のことから、「モンゴル・オルス」という歴史のアクターの視点から見る必要があると考えられる。

また本論では、モンゴルの民族形成史において、大モンゴル帝国の建立からモンゴル・オルスが後金（満州）に滅ぼされるまでの歴史を、チンギス・ハーンの「大モンゴル帝国」時代（1206-1270）、「大元オルスと諸カン国並立」時代（1270-1368）、そして、「モンゴル・オルス」時代（1369-1636）の三つの時代に区分することにする。

第二節、問題提起

今日のモンゴル史研究において、大元オルスが滅びて、モンゴルが蒙古高原に撤退後の 1368 年から 1636 年までの 200 年余りの歴史を「明代蒙古」、「北元」と呼んでいる。このような中国王朝を軸としてモンゴルの歴史を論じる転倒した事態は、モンゴルが自律的な主体であることの意味を否定するものである。それでは、モンゴルはどのような自己意識を持っていたのだろうか、また、その存在形態としての遊牧民の国家形態である「オルス（［ulus］）」とはいかなるものであったのだろうか。これらの問題を理解しない限り、この転倒した事態の解決は不可能だろう。つまり、「明代蒙古」にせよ、「北元」にせよ、「中国」という枠組みのみで語ることはできないのである。では、本論に先立って、従来の研究における①「明代蒙古」、②「北元」、③「暗黒の時代」と三種類にまとめることができる論述の立場を整理しておきたい。

2.1、　「明代蒙古」という立場

14 世紀後半から 17 世紀半ばまでのモンゴルの歴史を「明代蒙古」と命名して論じる考え方には二つの類型がある。一つは、中国史研究から出発した学者たちによる中国史における明朝時代を解明するために行われた研究に見られる立場であり、もう一つは、近年の中国国内で使われるようになったそれである。

まず、中国史研究から出発した学者たちの立場をみると、たとえば、那珂通世のような東洋学者の場合、中国文明を理解する上で、チュルク、モンゴル、満州といった外来民族による侵略ないし支配をどう捉えるかという課題に直面していた。那珂通世は、宋朝をもって、『支那通史』を「未完」のまま終えた。「未完」に終わったというのは、『支那通史』の総論に次のような計画がはっきり記されているからである。

> 唐・虞三代より六国の秦に合わせらるるに至るまで二千余年、是を上世と為す。秦より漢・唐を歴て宋・金の衰ふるに至るまで千四百余年、是を中世と為す。元初より明を歴て今に至るまで六百八十年、是を近世と為す。中世近世はまた各々其の三代に因り、分つて三紀と為す。毎紀一巻を以って之に充て、以て歴代治乱分合の概略を叙す（那珂通世 1972、p32）。

しかし、『支那通史』を見ると、上世、中世までで終ってしまっている。那珂通世は、その後「元の実録の疎漏なる、明の実録の誣罔あるは、著し」（那珂通世 1907、p61）いと、不満を述べている。そして、自ら『成吉思汗実録』という題名で、『モンゴル秘史』を日本語に訳し、注釈を付けた。那珂通世は、このような作業を通して、モンゴル人による中国の「蒙元時代」、またこの蒙元時代から生まれた漢民族の「民族国家」である明朝へアプローチしたのである。

中国研究において、大元オルス（モンゴル）・大清国（満州）のような異民族支配の多民族時代はもとより、漢民族の「民族国家」と言える明朝でさえその全体像を描くには、その周辺としてのモンゴルや女真との相互関係を理解することが求められる。和田清は、「明代蒙古」という枠組みによって、多くの研究成果を残した。和田清の研究は、モンゴル史研究に対する大きな貢献であると同時に、これらの業績が中国明朝の輪郭をはっきりさせる効果を生み出したといえる。中国と周辺民族との相互関係に注意した日本の東洋学者たちの研究姿勢と対照的に、

アメリカの歴史学者マーフィー・ローズは、その『アジア史』で論じたように、モンゴル、チベット、ベトナム、タイなど周辺諸国のほとんどが明朝の属国であったと片付けてしまっている（Murphey Rhoads 2003）。歴史研究において、一国史観に基づく歴史の書き方は成立しえないことは言うまでもないだろう。もちろん、モンゴル史研究においても同様に中央アジア、中国との相互関係を排除することはできない。

次に、中国国内における「明代蒙古」という使い方をみてみたい。これは中国を中心とした考え方に基づいており、近年になってよく使われるようになったが、明確な定義はない。

今日のモンゴル人は、ネーション（Nation）としてモンゴル国に、ナーツィヤ（Нация）としてロシア連邦領内、そして「民族」として中国領内に生活しており、モンゴル人を自称しながら、それぞれ与えられた政治形態はまちちまちである。これは近代史の結果であるが、彼らは「全モンゴル」（［Qamug moŋɣol］）、「氈房の民」（［isəgəi toɣorɣotan］）といった歴史的記憶を共有している。中国史を中心として「明朝蒙古」と呼んだ場合、そこにこれらのモンゴル人のすべてを含むことができるだろうか。もちろん、帝国時代の歴史を近代国民国家同様に語ることは不適当であると思われるが。それでは、「明代蒙古」というのはいかなるものか、その定義についてみていきたい。

鮑金鳳は、「明代蒙古《楚固拉干》述評」という論文のなかで、自ら「明代蒙古」と呼んだ時代を次のように定義している。

> 1368 年、元朝在中原的統治崩潰、末代皇帝妥歓帖睦尓北徙、至 1635 年漠南蒙古林丹汗子額哲率部降清、這個蒙古政権存在了 270 余年、幾與明朝相始終、史称「北元」(鮑金鳳 2004、P53)。

1368 年に元朝による中原での統治が崩壊し、（大元オルス）末代皇帝のトゴ

ンテムル（［Toɣontəmür］）が北方に逃走してから、1635 年に漠南モンゴルのリンダン・ハーン（［Liɣdan Qaɣan］）の息子エジェイ（[Ejei]）[3]が清に部族を率いて降伏するまで、この蒙古政権が 270 年あまり存続し、ほとんど明朝とともに生まれ、ともに滅び、歴史的に「北元」と呼ばれている。

明らかにこのモンゴル政権としてのいわゆる「北元」は、中国明朝と「ともに生まれ、ともに滅びた」ものであることが鮑金鳳の定義からも分かる。この「明代蒙古」は、いわゆる「北元」であり、そしてその「始まり」と「終わり」を「明代」と同じくした。両者の間に従属的関係はない。そして、この「北元」国は、「この 270 年余り存続した蒙古政権」である。『朝鮮李朝実録』「世宗荘憲大王」の壬戌 24 年（1442 年）のくだりに次のことが記録されている。当時モンゴル・オルスから来た使者は「現在、我がモンゴル・ハーンは照兀足所の地に住んでいる（我蒙古皇帝見住照兀足所地面）」[4]、「モンゴル・ハーンが即位し、数年がたっており、わたしは勅書を持って高麗に知らせることを委任された（今已累年、俺毎賚勅委来報知高麗）」[5]と朝鮮に赴いた理由を告げている。つまり、モンゴルの皇帝の自称は、「モンゴル・ハーン」であって、大元オルスの皇帝を自認していない。鮑金鳳の定義からもわかるように、「明代蒙古」の「モンゴル政権」は「北元」である。鮑金鳳が「明代蒙古」を定義するには「北元」というさらなる説明を必要とする用語を用いた。それでは、「北元」という立場を取り上げてみていきたいと思う。

2.2、　「北元」という立場

「北元」もまたきわめて最近の発明である。戴鴻義と鮑音は、その共著である『　［umaratu yuwan-u teuke］』（『北元史』1991 年）の中で、1368 年 8 月、大元オルス最後の皇帝トゴンテムルが、朱元璋に追われ、北京の北にある古北口

から万里の長城を抜け出て、モンゴル高原に逃げ込んでから、1635 年にモンゴル･オルスが満州国に降伏するまでの間に存在したモンゴル･オルスを指して「北元」という名称を使っている。

「北元」の称号は最初に『朝鮮李朝実録』の「高麗史」に記録されてい

1991;pp8-9)

(1370)

(1370)

(1377)

133

る。「高麗史」133 巻の「辛禑伝」に記録されているのは、「辛禑」の 3 年（1377 年）2 月から、北元の「宣光」の年号を用い、国内外の訴訟裁判は「至正条格」に従うと定めた。（中略）清代に葉维庚が著した『紀元通考』の第 1 巻「元昭宗」のくだりには、「順帝の太子アユシリダラ、洪武 3 年戊戌の年に応昌で即位し、年号を「宣光」と改め、国号を北元と改称した」と記してある。『ボロル・エリケ』では、「順帝没後、太子アユシリダラが 34 歳で応昌にて即位し、全モンゴル国の領土を保護し、国号を北元と命名

した」と記されている。このように国内外の歴史古典に北元の記録は古くから存在することがわかる。モンゴルの編年史でもすべて「北元」と呼ばれている。ただ漢文歴史古典に「北元」の呼称はまれにしか見られず、ほとんどの場合「北　」、「残元」、「　元」などなどと記されているのである（戴鴻義、鮑音 1991、　　9）。

この朝鮮（高麗）における「北元」という記録は、その当時のモンゴルと朝鮮半　の特　な　　により生まれた呼び方である。当時の朝鮮半　が、特　な　にあったというのは、大元オルスが崩壊する　より高麗の内部に　　王を中心に　元勢力が存在し、両国は　張関係にあったことである。『明史』「外国一　朝鮮」には、「明朝が　ったとき、王　は高麗の王として治めていた。太祖（朱元璋）は即位元年に使者を　　し勅書を与えた。洪武二年に高麗からの　民を　　する。（王）　は表書を　し、方　を貢ぎ、　　を求めた。帝（朱元璋）は　に　と金　と　文（高　　を任命する　　書）を持たせて使者として　　し、（王）　を高麗王に　じ、　と　、　を与えた。（明　、王高麗者王　。太祖即位元年　使　　書。二年　　其国　入。　表　、貢方　、　　。帝　　金　　文　　為高麗国王、　　）」中華書　　第　　、　　9 とある。つまり、大元オルス崩壊後の　年、　元政　を　進していた　　王が、明太祖の　　を受け入れたのだ。

大元オルスが滅びた後、トゴンテムル・ハーンから三代の皇帝は、東北の朝鮮（高麗）、西南の　南というまだある程　勢力が　　地　を　　して、明朝を包し、元を　　することを考えていた（和田清 19 4）。こうした対外関係のもとで「北元」という名称が生まれた。しかも「北元」という呼称の記録は、『朝鮮李朝実録』のなかの「辛禑伝」が初めてではなく、「　　王伝」から使われている。そ

れは、大元オルス崩壊後の　年である 1371 年、つまり明朝洪武 4 年からすでに始まっていたのである。

> 三月　巳、北元　　章　　、王　　等　帰　大明、　　民。以　本我地、　我国　命、可　　徒、　使来告　。

> 三月の　巳、北元の　　章　　、王　　などが大明朝に降伏することを　し、　民の　住問題を思　する。　　は元来我が領地であり、我が国が　し出を　ぐなら、　住問題は　れるだろうと、使者を　　してきた。

ここで「　　は元来我が領地であり、我が国が　し出を　ぐなら　住問題はれるだろう」ということに注意する必要がある。これは、朝鮮が「北元」という名称を　　した　　な　　を　　しているといえよう。それは、元から明になることによる高麗の領土問題が関係してくるからである。

> 後唐時、王建代高氏、　　新　、百　地、徒　　、　東京、　以　為西京。其国北　　丹、西　女真、南　日本。元至元中、西京内属、置東　　総　　、　　為　（中華書　『明史』第 27　、p8279)。

> 後唐のとき、王建が高氏にとって代わり、新　と百　を合　し、　　に　って東京とし、　　を西京とした。その国は、北に　丹と　り合い、西は女真と　し、南は日本である。元の至元の間、西京は内　に編入され、東　　総　　が設置され、　　を境　とした。

つまり、高麗の「西京（　　)」は、元の時代に元の「東　　総　　」に編入されており、その帰属問題が　在化するからである。　　行　　章である　　、王　が大明朝に帰順するには、その　民の　住問題が一つの外　問題であった。そして洪武二年に「　民」を　　したとのことと関連させてみると、それは、高麗

王朝にとって領土、人民の帰属にかかわる大問題であった。そして高麗の南には、大明朝の大軍が　　の地を治めており、北の国境である女真の地（現在の吉林境内）に大元オルスの名　ナガツォ（ [naɣaču]那　出）がモンゴルの　　軍である 20 万人の　力ともって　　していた。この勢力は 1387 年までに明軍と対　していた（　金　1998、p130-1)。朝鮮半　の安全から見れば、モンゴルの 20 万の　　軍が無視できない要　であった。　　王　　22 年（洪武 6 年、1373 年）に「北元はボディテムルとイェスンブケの二人を　　してきた（北元　　帖　　不　来　　)」時に、「最初、二人が国境に入った　、王は人を　わし二人を　そうとした。　たちは　　対の意見を　持した。そこで［王は］　　、返　、　まえて帝　（朱元璋の軍　）に　るという三つの　をたず　ると、大　たちは返　するのが良いとした。戊　、王は　間に使者と会見し『　は目が持　のため、光を見ると　しく　む。そのため　中に会見した』といった。すべて朝（明朝　）に知られるのを　れたためである。(初、二人入境、王　　人　之。　　不可。　是　以　　、　　、　　帝　三　、　　。戊　、王　見元使　「　　、見日　大　。　以　　之。」　　朝　知　)。」(　　『朝鮮李朝実録中的中国史料』　編巻上 p27）とあり、明朝とモンゴルの間で、外　的に攻められていた高麗国の実情を表わしている。「モンゴル政権」は「中華の正当な政権」としての正統性を失い、洪武の年号を使い始めた　　王当　から「北元」と呼ばれた。つまり、朝鮮から見ればモンゴルの政権は、「後元」として大元オルスの中華帝国の正統を引き継ぐものではなく、「北元」という四夷の　政権を意味するものであった。もともとモンゴル　大元オルスと朝鮮半　の関係は征服者と　征服者の関係であり、中国と朝鮮半　における　教を共有した文化的　　を特徴とするものではなかった。

いわゆる「北元」と高麗の正　外　の再　は、辛禑元年(明洪武 8 年、1375 年)のことであり、この時、　　王が暗　され、朝鮮半　内の　元勢力は　勢を失っ

ていた(和田清 1984、pp845-54)。そして、辛禑政権は「北元」の名称をそのまま使ったのである。朝鮮における「北元」の名称は、明朝の政権が安定するにつれて、「北元」の明朝に対する　　が非現実的になると、「　　」、「　　」、「蒙古」という名称によってとって代わられた。1369 年（洪武 2 年、己　18 年）の「五月、辛　に「至元」　の年号を取りやめ」、その　の　月の　巳から「洪武」の年号を使った。その後は、1377 年に辛禑王によって、戴鴻義、鮑音が取り上げている「宣光」の年号を使い、「至元条格」（元朝の　典）を　範とすることになる。李朝定宗　　王の元年(1399 年)以降は、「北元」の呼称が使わなくなる。この数　の　　は、「北元」という名称の一時性を表しているといえる。

戴鴻　、鮑音が主張したほかの二つの「北元」の記録は、特　なものであって、一般的に存在した通称ではない。『紀元通考』における記録は中国の歴史家の視点から見れば、「大元」を自称するアユシリダラ政権は、「北元」である。しかし、中原における統治を回　することを目指していたアユシリダラは、自らの政権を「北元」と称することはなかった。特にモンゴル人が「北元」を自称として用いたとする『ボロル・エリケ』からの引用を見ると、その原文は、「後元」（［qoyitu yuvan ulus］）であり、「北元」（［umaratu yuvan ulus］）ではない。『ボロル・エリケ』のフルタイトルは『大元の　　の数　』であり、その著者ラシプンスクの考えでは、大元オルスは元朝を建てた元世祖フ　ライ・ハーンではなく、チンギス・ハーンの大モンゴル帝国から始まるものである。そして大モンゴル帝国時代も、モンゴル高原に　退後のモンゴル・オルスの歴史も「大元」としてとらえている。『ボルル・エリケ』では、大元オルスが二つの　　に分けられ、「後元」は 3　人のハーン、　　年の歴史を有し、「　元」となるチンギス・ハーンから数えられた 14 人のハーン、1 4 年の歴史と対を成している。そして、この「　元」「後元」からなる大元オルスの正統性を継　したのは、『ボルル・エリケ』の著者ラシプンスクの生きた「大清国」であった。

上述のように、「北元」という名　は、戴鴻義、鮑音が　くように、「漢文歴史古典に「北元」の呼称がまれにしか見られず」、朝鮮における歴史書　の記録でも一時的にしか使われたことのない呼称である。また『ボルル・エリケ』のように「大元オルス」を軸にした 1　世紀以降の歴史書は存在するが、戴鴻義、鮑音がいう「モンゴルの編年史でもすべて「北元」と呼ばれている」という事実は存在しない。もしすべてのモンゴル編年史で「北元」と自称したのであれば、漢籍や朝鮮史の中から根　を探る必要は全くないのである。そのため、モンゴル・オルスを「北元」と命名するには一連の作業が必要とされる。　　はこの点で新しい視点を提供している。

　　は「明朝と北元　蒙古の対　は中国史における第三次の南北朝である」（　　1997、p196）と主張するが、その　いは明らかにモンゴル・オルスが明朝と「ともに生まれ、ともに滅びた」歴史事実の不　合を解消するためである。

> 北元　蒙古　　、明朝　　、　無非是大一統的元朝崩潰以後、在元朝的内建立起来的国家。這是一個重要的、　是基本的歴史事実。這一歴史事実人　　北元　蒙古是十四世紀至十　世紀建立在元代中国領土上的一個国家、　和同時的明朝一様、是元朝　　来的中国領土上　存的両政権（　1997、p199）。

> 北元　蒙古であれ、明朝であれ、いずれも大統一的な元朝が崩壊後、元朝の内で建立された国家にすぎない。これは一つの重要な、かつ基本的な歴史的事実である。この歴史事実が人々に明らかに　しているのは、北元　蒙古は 14 世紀から 17 世紀に元代中国の領土上に建立された一つの国家であり、それは同時代の明朝と同じく、元朝がのこした中国領土上に並存した二つの政権であった。

の出発点は「元朝がのこした中国領土」である。そして、モンゴルの皇帝たちは、終始自らを正当な大元の後継者であると自認し、大元オルスの最後の皇帝が逃走する　に中国の「伝国の玉　」　をもっていき、それを「大元」の正統な後継者の証とした。　　がいうには、明朝は「　　を　　し、わが中華を回　する」というスローガンを　げたが、それは夷　を　　するという意味ではなく､統治権を漢民族ないし中国が所有するべきという意味であるという｡「　　」を有する者が中国の正統を受けるのであり、この「　　」とは､「元朝が支配していた　　でありそれは 13 世紀から 17 世紀中期までの中国　　であった」(　1997、p198)。明朝はこの　　を統一できなかったため、中国領内における一つの政権であり、北元　蒙古と並んで、中国史における第三次の南北朝となったというのが、　　が提出した「第三次南北朝」理論である。　　のこの大元オルスが征服支配　におさめた　大　　に立　する歴史視座からみれば、現在の中華人民共和国もまた「第四次南北朝」といえるかもしれない　。

完全に中国史の立場に立ってみると、確かに　　のいうとおり「第三次南北朝」であるように見える。しかし、　　は意　的に無視していることがある。それは、モンゴルの征服王朝としての大元オルスは､「三教立国」　を立国の理　とした中国王朝であると同時にモンゴル帝国の後継者であるという二重の性格をもつものであるという点である。元始祖フ　ライの　出に建　としてはモンゴル帝国のすべてのオルス（諸汗国）が　与している　し、また元朝が滅びるまでのすべての皇帝の勅　にモンゴル・ハーンの称号 [3] を使っている。大元オルスの歴代ハーンたちは、あくまでモンゴル帝国の諸汗国を含む大モンゴルによって構成された軍事力に　に中国の皇帝でありえたのであり、中国は元朝時代を始終異民族支配とし、明朝時代には大元オルス諸皇帝は中国の歴代帝王を祭る帝王　からも　　されたのである。　　は、その中国王朝としての性格を過大評価することによって、自らの「第三次南北朝」という説を根　づけているのである。

また、元朝のモンゴル皇帝たちは、その　大なる権　をもって、中国王朝の治の象徴として　旨の「　」まで　かすものであった。元朝時代の皇帝の　旨には、あくまでも中国文化の完全受　を　　したモンゴル・ハーンたちの「野　さ」が無意識にあらわれている。そこには元朝のもう一つの性格　モンゴル帝国たる性格がはっきりとあらわれている。たとえば、大統 3 年（1335 年）の　宗皇帝[4]が　西　　百　大　　に　てた　旨を見ると、中国の伝統的な　旨とはかなり異なった形をとっていることが確認できる。まず、第一の特徴としては、モンゴルの祖先崇拝の表れとして歴代皇帝の名　が一列に並べられていることである。そしてこれらの皇帝の名　は、太祖、世祖といった中国皇帝の　号ではなく、モンゴル・ハーンの名　であることも指摘できる。その　旨を次のように訳出した。

長生　の力のかげで

大なる　の保護のもと、

皇帝の　旨、行中書　、行　史　、行宣政　の　人たちに、宣　　人たちに、軍　たちに、軍人たちに、各　　のダルガチ[5]たちに、　　する使者　　たちに、百　たちに、和　たちに

宣告する

旨

チンギス・ハーン

オゴデイ・ハーン

セチン・ハーン

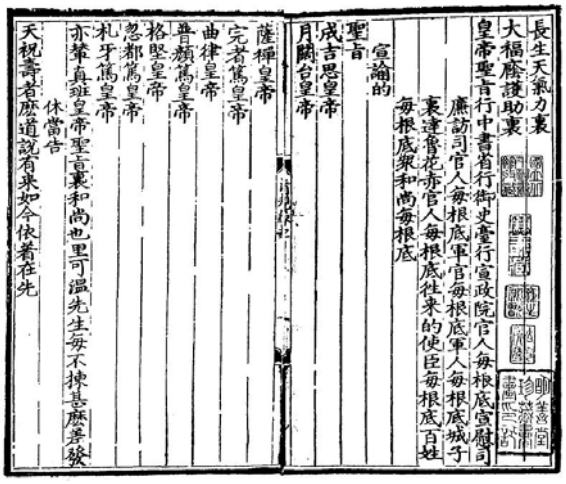
ウルジート・ハーン

フルグ・ハーン

ボヤント・ハーン

ゲゲン・ハーン

トックト・ハーン


長生天氣力裏
大福廕護助裏
皇帝聖旨行中書省行御史臺行宣政院官人每根底宣劄司
廉訪司官人每根底軍官每根底軍人每根底城子
裏達魯花赤官人每根底仵來的使臣每根底百姓
每根底衆和尚每根底
宣諭的
聖旨
成吉思皇帝
月闊台皇帝
薩禪皇帝
完者篤皇帝
曲律皇帝
普顏篤皇帝
格堅皇帝
忽都篤皇帝
札牙篤皇帝
赤斡真班皇帝聖旨裏和尚也里可温先生每不揀甚麼差發
休當告
天祝壽者麼道說有來如今依着在先

宗皇帝オハーガト・ハーン　旨

ジャヤート・ハーン

イリンチ　ル・イルチマル・ハーンの　旨、和　たち、　リスト教徒たち、

　　たちはいかなる　　・　　からすべて　除されるべくことを告げる。

（以　略）

この　旨の特徴は、①祖先崇拝のあらわれている点、②モンゴル人が崇拝する「長生　」を王朝の「正統」より　重している点、③　旨の文章から明らかにモンゴル語を　　的に　語ごとに訳したため、　教が追求する「　々たる　　さ」が欠けている点にある。これらの特徴は、モンゴルの統治者たちの強い意識を明らかに　影したものである。

大元オルスが有した二つの性格　大モンゴル帝国の継　者であると同時に、女真人の金朝にとってかわった中原政権としての二重の性格は、南宋朝を統一したか否かに関係なく、大元オルスが成立する　から付与されていたものである。1234 年にモンゴルに滅ばされた金朝は、中原を有し、　子の　　東を領有し、

子祭祀を実　に　るが、南宋は漢民族による国家であるほかは、中原地方、子祭祀の主　、伝国玉　という正統性の象徴をすべて金国に奪われていたのである。イケ・モンゴル帝国は金国を滅ぼし、ある意味で金国にとって代わり、これらの権　を有した。実　に当時、モンゴルに　　した　　、　律楚　などの学者たちはそう考えていたのである。しかし、フ　ライ・ハーンは　学者ではない。彼が南宋を　した理由は、「　　統一」という中国伝統思想に由来するものではなく、「長生　」（ムンケ・テンゲリ）の力で、　ムブーティブ　における「五色四夷」の国々をすべて支配するべきというモンゴル帝国の「五色四夷」の支配理　から出たものである。「長生　」がモンゴル・ハーンに　けた支配すべき「五色四夷」は、「　　」そのものをはるかに　えたものである。フ　ライ・ハーンが著し、16 世紀後半に　トクタイ・セチェン・　ンタイジが発見し、編　を　えたとされる『アル　ン･ボヤント・　ムン･ツ　ガン･テウケ』(『　　』[arban buyantu

nom-un čaγan teüke]『十　　の典章』以　『ツ　ガン・テウケ』と略す）には「真中の　くものすべてを支配すべくイケ・モンゴル、東方には　ルンゴス（朝鮮)、　デグン（東北遊牧民）の二つ、南はヒタド（北方の漢民族)、ゲリヤド（南の漢民族）の二つ、西は　ルボ（ネ　ール)、　ラドール（中央アジア）の二つ、北はタシク、チベットの二つの五色四夷の九大国が　　するほど知らせしめた（　　」(　金　注釈『十　　白史　』1881、p86)とある。同書 99　に「白い」朝鮮、「黄色い」　ラドール、「　い」漢人、「黒い」チベットに「　い」モンゴルと色を付けて区　し、それらを合わせて「五色四夷」となる。これは中華思想の　　そのものと　って、文化文明による区分ではなく、仏教における人間世　の諸色と北方遊牧民族のシャーマンニズムにおける方　の説による　　を合わせたもので、「長生　」の力で、「　くもの（生命あるもの）すべて」を支配するというモンゴルのハーンたちの野　である。そこに「　　」のような文化的な　　は存在しないのである。

もちろん、「　　」の概　は固定したものではなく、その時代時代の解釈によって　ってくるものである。しかし、そうであっても、明朝が求めた「　　」そのものも、　　がいうように「元朝が支配した　　でありそれは 13 世紀から 17 世紀中期までの中国　　である」と理解するには大　な無理を感じる。明朝の『国朝典章』「皇明本紀」の「洪武五年　」の明太祖・朱元璋が　南に　った勅　の中に、次のような記述がある。

（　略）　起　　、　　、　基　　、命　四征不　、其間西　漢主　、東　　王張　　、南　　、北清　　、　安華　、　我中国之　　。為　民　戴即皇帝位、定有　　之号　大明、建元洪武、是用　使外夷、告　意、使者所至、　夷　長、称　入貢　　。

（　略）　は　　からの出で、　を捨てて　起し、　　に国家の基　を　き、

諸　軍に命じて四方における朝　に服従せ　ものを征服し、そのあいだ西には漢の主　　を　定し、東に　の王張　　を　　し、南には　　（建　と広東　）を　定し、北には　（現在の　北）　（現在の　北　の北部と　東南部を含む）を清め、華　を安定させ、我が中国の固有領土を回　した。　は　民の　戴を受け、皇帝の位に即し、　　の号を大明と称し、年号には洪武を建てた。これをもって外夷に使者を走らせ、　の意を広く知らせ、使者の　るところ、　夷の　長は、　を称し貢ぎを献上した。

明朝にとって「　　」とは「中国固有の領土（中国之　　）」であり、がいうような「13 世紀から 17 世紀　半までの中国　　」ではない。明朝にとって、　　は、「北　」、「北　」、「　」であり、そのため西、東、南は中華内部のものであるため「　」（　定する）あるいは「　」（降伏させる）するものである。一方、「北　」、「北　」が多く　り住み、　丹人の　朝（916-1125）、女真人の金朝（1115-1234）とモンゴル人の大元オルスの三代の異族支配により、「　化」が進んだ　（現在の　北）と　（現在の　北　の北部と　東南部を含む）の地は「清」（清める）ものであり、その　れを取り除かなければならなかったのである。「　化」は文字通り、「漢化」の　対語で、「中華を以って、夷　を化す」ことの　の　れである。

朱　祖は、『後金国汗　氏考』のなかで次のように指摘している。

元が中元に入り、はじめて　象的な名　を持って建国の名号とした。　清の太宗皇帝が「清」の称号をとったことは、実に意識的にそれにならったもので、彼らはあくまでもモンゴルが中国を統一後、異民族による　　の色　をさせることを　んだのを学んだのである　。

モンゴル、満州による中国支配の性　は異民族による征服王朝であり、その統治のためにとった妥　　をもって、それを「第三次南北朝」として処理するのは、

やはり強引な結論である。

力　　が編著した『蒙古史　要』は、「明代蒙古族」という　立の章を立てて、モンゴル・オルス時代の歴史を論じている。

> 1368 年、明軍攻　大　、　　元朝在中原的統治結　。元　北徒後、　自称「大元」　「大蒙古」、国号　　、王統　没有改　（　在成吉思汗家族内部）、　是、従統一多民族的中原統治王朝転　為幾　　一民族的遊牧政権、明初　高麗人称作「北元」。北元蒙古遊牧政権従元　宗至林丹汗伝23位大汗、1635 年　　後金、幾　與明朝相始終（　力　　2006、p131）。

> 1368 年、明軍が大　を　としたことは、元朝の中原における統治の終　を象徴するものである。元の朝　が北に　った後、　「大元」あるいは、「大蒙古」を自称し、国号はそのままであり、王統も　わらなかった（　としてチンギス・ハーン家族内部にあった）が、しかし、中原の多民族的統一王朝からほとんど　一民族から成る遊牧政権に転　し、明の初期には高麗人から「北元」と呼ばれていた。北元のモンゴル遊牧政権は、元の　宗からリンダン・ハーンまでに 23 人の大ハーンに継　され、1635 年に後金によって滅ぼされ、ほとんど明朝と始まりと終わりが同じだった（　力　　2006、p131）。

力　　は、モンゴル・オルスとは「大元」あるいは「大蒙古」と自称し、チンギス・ハーンの王統を　持したほとんど　一民族からなる遊牧政権であることをはっきりと論じている。そしてこの政権が中原の政権から転　したものであり、朝鮮から明の初期において「北元」と呼ばれたものであると述べている。

ここで重要なのは、　力　　も言っているように、モンゴル・オルスは、「元朝」とはその性　を完全に異にするものであり、またその 270 年の歴史全体では「大元」が初期に使われただけで、「大モンゴル・オルス」が　んで使われた自称であ

った。そして「北元」は、　　でも論じたように朝鮮（高麗）における一時的な呼び名であったにすぎず、中国においては、明朝から人民共和国に至るまで「北元」の称号は認められえ　ものであり、「中華」にとっては　　を思い出させるものでさえあった。

しかし、人類学の視点から、「明代蒙古」が非常に重要な視点であることも認めなければならない。それは、「明代蒙古」として存在し、「中華」の中へ　　に け込んでいった「残　」たちを指すものでなければならないだろう。明代史料に、元　はその 7 つが撤退に間に合わず残され、元主について逃げた残りの 3 のうち、その 3、4 が　　し、残りが　漠に逃げ込んだとの記録があり、四部の編年史にも元朝の末代皇帝トゴンテムル・ハーンが大　から「四十万モンゴルの六万を連れて古北口から逃げ出た」と記録している。そして、明朝「文皇帝四　　」の中には、文皇帝の　　が　　したとき、その　　に　さった　を抜き取った四人はすべて「　　軍」（モンゴル　軍を指す）だったとある。これは明朝中国の国内に取り残されたモンゴル人の研究に活用されるべき研究枠であり、また中国の民族関係の発　における重要な課題のひとつであるといえる　　。

2.3、　「暗黒の時代」という立場

著名なモンゴル学者ウラジミルツォフは、論文「モンゴル書面語とハルハ方言の比較文法」(1929)において、モンゴル史における 1368 年以降の 200 年あまり期間を「暗黒の時代」と呼んだ。「暗黒の時代」は、モンゴルの封建紛争時代である 2 世紀近い歴史を包括した教条でもある。17 世紀以降のモンゴルの文化、社会的復興をモンゴルの「復興」の時代と呼んだことからも「暗黒の時代」の意味合いがはっきりと分かれる。

この「暗黒の時代」という断定は、のちにウラジミルツォフ自らによって修正されたにもかかわらず今日の研究にその影を落とし続けているといえる。王風雷（モンゴル名前は、ボ

ヤンヘシグ）が著したモンゴル文化研究シリーズとしての『教育』（《　》［surɣan kumuǰil］）は、チンギス・ハーンの時代から清末までのモンゴルの教育通史であるが、しかし、1368 年から 1635 年までの歴史を完全に省略してしまっている。まさに「暗黒時代」を反映した格好である[23]。しかし、この時代のモンゴルの教育状況は通史に書けそうなものがなかったのだろうか。明代の簫大亨[24]は『北虜風俗』のなかの「尊師」の項目に次のことを記録している。

> 彼文無詩書、文字非六体、烏有所謂師。然就其能書者、名曰傍什、此師也。学書者、名曰舎畢此弟也。舎畢之従傍什学也、初則持羊酒、行叩首礼、後雖日見、日叩其首。必至書写已成、然後謝以一白馬、一白衣。衣或布或段、惟随貧富制之、無定数也。夷人能書、則随酋首往来、列於諸夷上一等。以故夷中最尊敬傍什、法有侮慢傍什者、罰馬一匹以給之。…往者書用板、或以皮、近款貢来、毎給以紙筆之具（簫大亨『北虜風俗』「尊師」）。

彼（モンゴル）の文には詩書がなく、文字には六書がなく、所謂師なるものはない。しかし字が書ける者は、バクシ（バグシ［baɣši］先生という意味）と言われ、これが師である。学ぶ者は、シャビ（シャビ［šabi］生徒の意味）とよばれ、これが生徒である。シャビはバグシに従って学ぶには、初めは羊と酒を持参し、叩頭の礼を行い、その後毎日会うにしても、毎日会うたび叩頭の礼を行う。学業を修めるとき、また白馬一匹、白衣一着を礼として奉げなければならない。衣は布であり、シルクであり、完全にその貧富の程度によるものである。夷人は書くことができると、酋長に付き添い、諸夷に比べて一段上の地位につけるのである。ゆえに夷のなかでバグシが最も尊敬され、法律にはバグシを侮辱したり軽視したりしたものは罰せられ馬一匹をバグシにあげなければならない。…むかしは板や皮に書いていたが、最近では朝貢にくるたびに、（明朝が）紙や筆を与えている[25]。

「暗黒の時代」においても、モンゴル社会の内部において、文化、教育の活動は消えることなく、一部の歴史資料が伝えるようにそれほど「野蛮・無知」でもなかったようである。少なくともバグシは尊敬される存在であり、またモンゴル・オルスの初期における戦乱時代には紙がなかったため、板や動物の皮にまで書いていたのである。そして、著名な「白樺の書」もモンゴル・オルスにおける文化、教育活動の状況を伝えるものである（二木博史、1980）。

それでは、「暗黒の時代」とはいかなるものであるのか、それが意味するものは字面的な意味にとどまるだけのものではあるまい。

このモンゴル史における「暗黒の時代」とは、1934 年にウラジミルツォフがなくなった後に出版された氏の『蒙古社会制度史』（“Общественый строй Монголов-Монголъский коъвой феодализм ）において、三つの時期に区分されているモンゴル史のうち、第二の時期となる封建制度隆盛期にあたる。ウラジミルツォフは、モンゴル史において、①古代（11 世紀－13 世紀） ―封建制度の発端、②中期（14 世紀－17 世紀） ―封建制度の興隆、③近代（18 世紀-19 世紀および 20 世紀初頭） ―封建制度の崩壊の三分法を用いている。

ウラジミルツォフが分けた第二の「封建制度の隆盛」期を便宜的にさらに三つの期に分けると、①1368－1391 年のモンゴル・オルス形成期、②1391－1470 年の封建紛争期と③の 1470 年から 1635 年までのモンゴル・オルスの復興期の三期となる。ウラジミルツォフがいう「暗黒の時代」は、①と②の二百年あまりの期間であり、「復興」と呼ばれたものは③から始まる時代を指す。

それでは、①のモンゴル・オルスの形成期という時代はいかなる状況であったか見てみたい。この時期は、大元オルス朝廷が明太祖・朱元璋におわれ、モンゴル高原に撤退した時期であるが、大元オルスの政権を復興させる企図は完全に消失していなかった。元の末代皇帝トゴンテムル・ハーンからその息子、孫までの三代の皇帝は、元の称号を用い、廟号（諡）、年号を用いていた。1370 年（明洪武 3 年）にトゴンテムル・ハーンが死に、

息子のアーユシュリーダラ(　愛猷識理達臘)が即位し、ビリグト・ハーン(　［Biliɣtü Qagan］)と称した。中国式の廟号は昭宗であり、1371 年を宣光元年とした。ビリグト・ハーンが 1378 年に亡くなると、弟のテグステムル(　脱古思帖木児)が即位し、オソハル・ハーン(　［Uskal Qagan］)と称し、中国式の廟号はなく、年号は「天元」とした。つまり、オソハル・ハーンが即位するまでには、大元オルス時代の皇帝の廟号を保ち、年号を有するなど、中原への支配に備えていたのだ。またその行政組織も大元オルス時代のそれを維持してた。『明史』の列伝 215「外国八」に記録されている「韃靼」の記録によると、

洪武十一年夏、故元太子愛猷識理達臘卒、太祖自為文、遣使弔祭。子脱古思帖木児継立。其　相　　、　子　　章、国　　、　章完者不　、　　不　、　　知　　足等、　　応昌、和林、時出没　　(『明史』「太祖本紀」)。

洪武 11 年(1378 年)夏、亡元の太子アユシリダリアが死に、太祖は自ら弔文を書き、弔使を派遣し弔った。その子のテグステムルが即位した。その丞相は　　、　子　章、国　に　　が、　章に完者不　、　　不　、　　知　に　足等がいて、応昌、カラ　ラムにいて、　々辺　近くに出没した。

リグト・ハーン（1370－78）時代には、大元オルスの残存勢力はかなりの力を保っていた。1372 年に　リグト・ハーンから高麗国に　った国書には「　因乱、　　北。今　　帖　　為相、幾　中　。王　世祖之　　、　　力、　正　。(近　　乱により、北に　り、今はフフテムル(　　帖　　)を　相とし、中原は間もなく　　できる。王もまた世祖の　であり、力を合わせて、　　を　し正すべきである」　と高麗国に　力するよう要　した。しかし　　王はそれを受け入れなかった。また、西南では、大理国と連合し、明朝を攻撃する計画があった。しかし、大元オルス　命皇帝の三代目であるオ　ハル・ハーンの時代になると　　は一　した。1378 年に　リグト・ハーンが　に、オ　ハル・ハーンが

即位した時には、統治領　は東満州から西は中央アジアに至る広範な地　であり、オ　ハル・ハーンの　元に 10 万人の精　部　がいた。しかし、1388 年に明軍から　命的な　撃を受けた後、長引く中原　　のプランに失　した色目人、漢人大　らは、南の明朝に降伏して行った。

その年の 3 月に行われた「　　子の　い」で、明朝　は、「（アユシダリの）次　地保　およびその　ら五十人余りをとらえ、　が三千人を率い、　女　万人余りと　　十万　をえて、持って行けない残りの　はすべて　き　う（　其次子地保　　主五十余人、　率三千、　女　万余、　　十万、　　之）」　という大　　をおさめた。とらえられた　は自　し、地保　は朱元璋によって　　へ　された。10 月にモンゴルの　地のトーラ　へ逃げ込んだオハル・ハーンはイ　デルによって　の　で　り　された。モンゴルのハーンの座は、大元オルス時代からモンゴルの　地に住んできたアリクブガ　の後裔の　に　った。このことは、大元オルス時代における中国　の統治方　や中国文化の影響を非常に　い時間で　　することになった。和田清は「　し北元の朝　はその後数次明軍に攻　せられ、窮荒に奔走して、年と共に支那風の文化を失掉したので、後には漸く蒙古本来の陋俗に返り、自らも記録すること　なるとともに、支那　からも十分には　えられず、為にその帝室の世系等にも多くの　　を残すことになった」（和田清 1959、p835）と言っている。ここでは事　以降のモンゴル統治　　の文化的　　を「年と共に支那風の文化を失掉したので、後には漸く蒙古本来の陋俗に返」ったと指摘されている。

ここまで見たように、大元オルス末代皇帝から三代にわたる後継者が明朝に追われ、転々と逃げ回ったこの時期には、モンゴルは外来の攻撃と内部の　　により　　に　われていた。そして大元オルス時代までに　てられた文化は、モンゴルの内部の　対勢力によって　　されただけでなく、モンゴルの　地まで侵攻した「　　の　徒」と明朝軍によって　　的に　壊され、訳された仏教　典　び皇

室の秘史などはすべて奪いつくされた。たとえば、マル　・　ールが　　の　を　しまなかった元世祖フ　ライの華麗なる　　であった上　はすでに　　となっていた。そして明朝軍は上　、カラ　ラムを　　させたあと、書　などはすべて中国へ持ち　り、その結果は、南京の大　と北京の　　の　　となった　。

それは、たとえば、洪武二年（1370 年）、李文　軍が応昌　を占領した後、「皇　である　的里八　　びその　　、　　などのもの、すべてを　に　った」（『明史』「太祖本記」）といったことである。そして明成祖（明朝　　帝、在位 1402　24）の五　にわたるモンゴルへの　征によって、大元オルス時代に持ち込まれた人的　び　　的中国文化の　　は全て奪いもどされた。明朝の　　とモンゴル保　勢力の　撃の二つの力が「蒙古本来の陋俗」の　　を促進した。

その一方、1388 年にオ　ハル・ハーンがアリ　　011　　012　　グブガの子　であるイェスデルによって　されると、モンゴル・オルスは　建　　時期に　入する。そして 1388 年から 1479 年の 100 年たらずの間に 14 人ものハーンが入れ　わった[3]　。

『アルタン・ハーン伝』には、政治の混乱　態を次のように描いている。「011　の子であるチンギス=ハーンの黄金の一族が、　い諸仏の化　セチェン=ハーンの　ちたてた黄金の　　を、明らかに諸　　の化　　オハート=ハーンが、上　の命によって失った次第はこのようであった。012 それよりこの方、いくいく人ものハンたちの世の間、　しみつつ、世間の政と仏の教えは定まらず、混迷してハンと　々、　と悪の区　もなく、ボルジギンの黄金の一族が衰えたそのときに（吉田順一 1998、p114)」である。それは、支配するハーンの「黄金の一族」と　民たる「　々」のものが区　なく混迷し、政と仏の教えが定まらない　　であった。その混迷を生々しく伝えているのは、『蒙古黄金史』

である。

「(オイラットの) 一方には家の中に、 く大なる を りて、 のうえに 氈の を張りて、 ンを(はじめ)として、三十三人のウルベルゲテン([Örbelgeten]) [3] と共に、四十四人のオタガタン([otaɣatan]) [3] と共に、六十一人の ある者を一つの より入らしめて、ふたつの より出さしめて、(の) を満たすまで したり。 れ実に『 人らの は 会に。 の は の格子に』という はそれより出でしなり(とふ)」[33] (林高四 1939、p64)。これは西モンゴルのオイラトのエセン大 が東モンゴルの皇族に対して行った大 である。四部の編年史はそろってこの事 を生々しく伝えている。

モンゴルを取り巻く外部 を見ても、昔ユーラシアをまたがったモンゴル帝国から生まれた諸ハーン国はすでに全面的に崩壊していた[34]。

「暗黒の時代」は、ワルター・ハイシッヒが指摘するようにモンゴルが、「さく分立し、相互に 目するグループ、中国からのモンゴル人の退 、これらすべては、モンゴル人統治の間、モンゴルの武力により保 されていた ーロッと中国を結 をも分 してしまった。そこで 人は再び を んだ。次第にウラルのかなたの地 は れ られていった。モンゴルのモンゴル人はそのまま世の注意を引くことなく過ぎて行った。草原の明と農耕の国中国両者の間の対決の昔ながらのリズムに乗って、彼らはこの何世紀もの間を通じての唯一の歴史的業績として、中国国境をおそっては不安におびやかし、掠奪品で腹いっぱいになって引き上げるのだった」(ハイシッヒ 1967、p58) という実態である。つまり、「暗黒の時代」は、政治的不安定が社会や文化の発 に不 であったのは確

かに一つの要因であるが、もっとも重要な　イントの一つは、モンゴルが歴史のから表に　り出たイケ・モンゴル帝国時代と　べると、その存在さえひそかにれられたことである。

しかし、ウラジミルツォフは『蒙古社会　　史』のなかで次のように「暗黒の時代」に対する認識を改めて表明している。

> 即ち、蒙古人がその歴史の「暗黒」時代、つまり、元朝の没落から十六世紀の後半の「復活」期に至る期間、その文化的遺産中の多くのものを保存し得たことが今日は明らかにされてゐるのである。換言すれば元朝時代の文献的伝説が中絶されなかった様に、蒙古人の文献や文書が中絶されなかったことが今や明らかとなったのである(ウラジミルツォフ 1941、p33)。

「暗黒の時代」に、モンゴルが大元オルス時代に比べて、多くの輝かしいものを失ったのは明らかである。しかし、「蒙古元来の陋俗」を速やかに回復することにより、「その文化的遺産中多くのものを保存しえた」のであった。そしてその成果は、「　乱と　乱が、過の出来事を証明する文書の保存を　　にした。モンゴル人の歴史は、とりわけ乱に満ちている。それにもかかわらず、モンゴル人は中央アジヤ諸民族の中では、最も多くの歴史書を持っていることが、ますます明らかになっている」（ワルター・ハイシッヒ　1964、p8）という「　かしいもの」でもあった。

そして、編年史は、モンゴルの古来の伝統であった口　文化の結　であることを無視しては、「暗黒の時代」は正しく理解できないのである。『モンゴル秘史』が、草原の人々の記憶を口　の伝統によって残した「史料」であるように、四部の編年史も人々が代々伝えてきた記憶から生まれたものである。　乱、　　、そして遊牧生活の定まらない　　中に文字による文化活　は大　　しい　　に　ったが、口　による　の文化そのものは消えたというわけではなかったのである。ラシード・ウッディン（1247-1318）は『史　』[35]にモンゴル人の口　伝統を次の

ように記録している。

これらの(事　)は　や　構などと見てはいけない、それは、モンゴル人には古くから自分の起源と系　を　持する　　があり、または彼らには教会や宗教がなく、他の(民族)のように教会（Millat）や宗教（Din）を通して教　を　ることで子女を教えることが出来ない。そのために両親が生まれてきた子女一人ひとりに氏族（qabīlę‿ḫ）や系　（nasab）に関する伝説を説明して教える。この伝統が彼ら（モンゴル人）によって　　に　られ、今でもこの伝統は　重され　られている（ラシード・ウッディン 19 3、 34）[3] 。

記憶に　る記述がどこまで　　できるかは問題視せ　るを　ないが、『モンゴル秘史』はチンギス・ハーンの 22 代の祖先にまでさかのぼって記述している。これについて、モンゴル語は親族称号が非常に発　している[3] ことと、ラシード・ウッディンの論述を根　とし、　　性のある記述であるという主張もある。

ここまで見てきたように、「暗黒の時代」という　定は、大元オルス末期からモンゴル・オルスの初中期の　乱による文化活　の中　、中華文明から「蒙古本来の陋俗」への退行を指すが、これは文字文化に基づいた　定である。それに対し、モンゴル従来の口　文化の伝統は 17 世紀の編年史に十分あらわれているのである。

以上、1368 年から 17 世紀初　までのモンゴル歴史研究における三つの立場をまとめてみた。それは、「明代蒙古」、「北元」と「暗黒の時代」という三つの立場である。今まで見てきたように、これらは、モンゴル史研究において、その研究の対象とされた「モンゴル」とはいったいいかなるものであったかという問いを無視してきたといえる。

「四部の黄金史」は、この「明代蒙古」、「北元」、「暗黒の時代」と呼ばれた 200

年の歴史の結果である。他者によってしか定義されなかった主体不在の歴史が 2 世紀近く間に　り上げたのは、「黄金家族」と「仏教の教え」を重　合わせた強な民族的アイデンティティであった。四部の編年史の存在は、このような研究立場を見直す作業の必要性を促すものである。

では、今までの四部の編年史研究には、どのような作業が行われてきたか。四部の編年史に関する研究を中心に　証していきたい。

第三節　先行研究の概観

四部の編年史に関する研究は非常に　　な業績を　んできたといえる。19 世紀初　に四部の編年史をはじめモンゴル編年史[3]　の存在が知らされてから、 書き本の発　、著者、編纂年代の確定などの文献学研究は多くの成果を上げている。モンゴルのST.ダムディン　　ルン、SH.　ラー、プラ　イなど、　ーロッ　（連）のW.ハイシッヒ、ジャムツォラー　など、中国には、　金　、　　など数多くの学者がいる。日本では、　林高四　、和田清、吉田順一、森田哲　らは、編年史の研究に大きく貢献している。また、編年史の　訳、ローマ字転　も　い時期から始まっている。言語学的に　連の学者M.H. Орловскаяは『黄金史の言葉』という編年史の言葉を　　的　った研究を行っている。しかし、モンゴルの精神史における編年史の存在の意味と位置づけはどうなるか。これらの研究のうち、本研究と関連する研究を中心に　証してみていきたい。

ウラジミルツォフの『蒙古社会　　史』は四部の編年史を次のように評価する。

> ナン・セチェンやアルタン・トプチ[3]　や「ラドロフの歴史」[4]　の著者は、　もなく、叙事詩の形となった口伝の　語を　用したばかりではなく、その大部分は今日に伝はって　ないが当時は用ひ　た文献をも　用したものである。周知の　く、　ナン・セチェンは自己の用ひた資料を列　さへし

て　る。大多数の場合、これを同一視することは出来ない。　論、　ナン・セチェンにしても、アルタン・トプチや『ラドロフの歴史』の無名の著者にしても、良い資料を用ひずに(仏教思想の影響を受けた)悪い西蔵の資料を重用して、チンギス・ハン伝関係の資料を取捨し、当時の叙事詩的伝説に迎合して年代記を混乱させたのであるが、それにも　らず、蒙古人の「暗黒」時代を通じて生活は生き生きと書き出すことができたのである（ウラジミルツォフ 1941、p35、強　　は　者による)。

ここで「良い資料を用ひずに(仏教思想の影響を受けた)悪い西蔵の資料を重用して」に指摘されている「悪い西蔵の資料」とは、17 世紀以降のモンゴルの編年史によくみられるインド、チベット、モンゴル同起源説を指している。それは、17 世紀以降のモンゴルの編年史において、チンギス・ハーンの起源をチベットからインドの古代皇帝たちへ遡って説くものである。では、なぜこのような説が編年史の著者たちに　んで使われたのだろうか。ウラジミルツォフは、その理由を「けだし、か　る著者　は（　ナン・セチェンは常にさうである）蒙古人が満州人の治　にあって、この保護を受ける「黄　　の　　」に支配されるに至った時代にその著書を書いたものだからである」と説いている（ウラジミルツォフ 1941、p35-36)。これは、明らかにウラジミルツォフの　解である。チンギス・ハーンの黄金の一族である「アルタン・オルグ」がブッダの　なる後裔であるという仏教　典における　語を　用して説くようになったのは、四部の編年史に始まるものではない。実　には、ウラジミルツォフの見解と　に、仏教がアルタン・ハーンによってモンゴルに再び導入された　に始まり、仏教の広まりと同時に形成されたものなのである。

ウラジミルツォフは、モンゴルの社会構造を解明するために必要な史料を求めるという点もあって、当　モンゴル人の　によって書かれた史書からより多くの

価　ある資料が見つかることを　んだに　いない。ただ、ウラジミルツォフには、モンゴルの歴史家たちがなぜこのような書き方をとったかを　く追求する必要がなかったといえよう。2006 年に中国内モンゴルの　い学者シド　ログ(　　日古)は『17 世紀蒙古編年史与蒙古文文書　　研究』を著わしている。　　日古は、17 世紀のモンゴルにおける編年史における「黄金家族」正統観に注意を　ったが、編年史に表われた著者たちの仏教と「黄金家族」が重なり合った強い民族感情の形成を論じようとはしなかった。　　日古は、インド起源の説を「明らかに、仏教の説を持ってチンギス・ハーンを神格化する意　だけだ」(　　日古 2006、p91)として　　に片づけてしまっており、チベットラマ教の教えとチンギス・ハーンの「黄金家族」が重なりあったモンゴルの民族意識の構造を解明するに至っていない。

モンゴルの民族的アイデンティティの重要な内　の一つである「黄金家族」概　については、　　日古の『17 世紀蒙古編年史与蒙古文文書　　研究』では一つの章をたてて論じているが、それは、　尓　　と　　日古、特　　らによる「黄金家族」の概　をめぐる論　からまとめられたものである[4]。彼らは「黄金家族」の形成された時代、「黄金家族」の指している所記、そしてチンギス・ハーンのボルジ　ン氏族と「黄金家族」をめぐる諸問題について論　を行った。　　日古と特　　は「黄金家族」は、ボルジ　ン氏族あるいは「元朝皇室」と同義語であり、元朝時代より先に形成された概　であるとみた。しかし、　尓　　は「黄金家族」とは、元朝始祖皇帝フ　ライ・ハーンの直系後裔に限定されるものであり、15 世紀以降に形成されたものであると主張した。論　は二年にわたって行われ、　論の範　も非常に　広く、かつ新　両世代の間の論　という点で　味　いものであった。しかし、結果的にどの程　の成果を出したのだろうか。2005 年出　された　尓　　教　の論文　『蒙古和其他北方民族文史論　』にはその論　の全論文が　録され、　　日古、特　　の関連論文も　付資料として　録されているが、そ

の　年に出　された　　日古の『17 世紀蒙古編年史與蒙古文文書　　研究』には、尓　　教　の論文が　考文献としてさえ　場することがなかった。論　に対する両者の態　からもわかるように、共通認識、意見を導き出す結果に至らず　行で終わったことが明らかであり、「アルタン・オルグ」(「黄金家族」) の概　は、モンゴル史を語る　ーワードとして、いまだに究明を要　している。

モンゴル編年史の研究には、最近の研究成果として、13 世紀以来のモンゴル年代記に対する総合的な研究である森　哲　の『モンゴル年代記』がある。また田　　『蒙古源　』(2004 年、第一書房)、　上治「　トクタイ　セチェン　　ンタイジの研究」(2002 年、風間書房) などがある。歴史、言語学的研究では、金漢の「モンゴル黄金史考」(『李相　　華　記　論　』)、「黄金史研究」(『東文化 6』1973)、「蒙文史記黄金史」(『東　文化 14』1973)、　　根の「モンゴル歴史資料並びに「蒙古源　」について」(『東　文化 1』1981) など　国の研究も上げることができる。　国におけるモンゴル研究は日本に　べて最近になって始まった分野であるが、モンゴルと朝鮮半　との関係により『李朝実録』など朝鮮の歴史資料に記録されたモンゴル・オルス時代、特にモンゴル・オルス初期に関する歴史についての記述は、漢籍より　　で　　性が高いといえる。

以上、まとめてみてきたように、編年史に関する研究は非常に　　であるにもかかわらず、17 世紀に書かれた四部の編年史にあらわれた「黄金家族」と仏教の教えが重なりあってなした民族的アイデンティティに注目し、その形成の解明を追　するものはまだない。

第四節　研究の　説　び研究の方

4.1　研究の　説

モンゴル史における 1368 年から 1635 年に至るまでの歴史は、「明代蒙古」、「北元」　び「暗黒の時代」として語られてきた。この二百年の歴史の結果として 17 世紀の編年史が生まれたのである。いいかえると、本論で研究の対象とする四部の編年史は、主体不在として語られた「明代蒙古」ないし「北元」と呼ばれた「暗黒時代」の　し子である。本論は、これら四部の編年史をモンゴル・オルスとして、新たな民族を形成していく結果であることに注目し、よって次のような　証を行うものである。

1368 年はモンゴルの歴史において非常に重要な年である。この年にモンゴル人皇帝が中国を追われ、モンゴリアに引き上げた。そしてこのトゴンテムルという大元オルス最後のハーンは、モンゴルの　地に撤退することを　　した。というのも、トゴンテムルは、民族解　を目指し、「　　を　　し、わが中華を回　する」スローガンを　げ、　　に　える漢民族に対し、征服統治を　　させる　を見る一方、モンゴル本土に根　している　中国化勢力の　撃をおそれ、モンゴリアの　地へ撤退しなかった（　金　1985、　　子 2002)。その後、大元オルス皇室は三代を通して、20 年あまり明朝と　　した結果、モンゴルの統治権（1388）がアリクブガの後裔に　ることによって終結する。大元オルスの終　をもって、イケ・モンゴル帝国から生まれた諸カン国の　は完全に消える。これにより、モンゴル高原を取り巻く周辺諸国はモンゴルの支配から　立し、モンゴリアの本土に残された遊牧民たちは、東西の世　とつながる　を　　される。中国明朝が万里の長城を　きなおし、モンゴルを完全に　じこむ　　対　をとったのと同じく、モンゴルに支配された諸国も　　したに　いない。　しい　　の取り巻く中で、新たなモンゴル民族の形成が始まったのである。

この新たな民族形成のプロセスは、元朝時代に受け入れた中国文化の喪失ない

し排除、「黄金家族」を中心とするモンゴル遊牧文化の　元と仏教導入による思想面での統合という　をたどった。その結果、四部編年史にあらわれた「黄金家族」と仏教の教えが重なり合う二重構造をもった民族意識が形成されたのである。

4.2　研究の方

四部編年史にあらわれたモンゴル民族のアイデンティティは、黄金家族と仏教の教えを重　て持つ二重構造をもったものであった。では、このようなアイデンティティがいかに形成されたのだろうか。この問いに　えるには、まずその主体はいかなる性　のものであったかを見なければならない。

1368 年から 1635 年までのモンゴル史についての研究における三つの立場はすでに論じた。「明代蒙古」、「北元」　び「暗黒の時代」という歴史認識からは、モンゴル・オルスの主体が見えてこない。　　子も指摘しているように、いわゆる「明代蒙古」、「北元」時代は、モンゴルにおける新たな民族形成の時代であり（　　子、2002)、和田清の言葉を　りるなら、「蒙古本来の陋俗」への回帰の時代であった。特に、中国の中華文明の視点から見れば、夷　はただ「　」、「　」であり、中華からの　認を　ずには国体をもつものとしては認められないのである（ワン・ガンウー、2007)。ここで重要なのは草原遊牧国家としてのオルス([Ulus])を中国風の「国家」または　ーロッ　的な　　国家としての State と区してみなければないことである。

4.2.1「城郭国」－　　国家

ヨーロッパや中国のような農業地域における国家概念は、幾つかの都市を中心とし、支配がその周辺地域へ広まったものであるが、遊牧民のオルスは文字通り遊牧国家である。岡田英弘によると、「国家」とは「都市の主人」であり、「英語にはまた、ラテン語から直

接借用された「ステイト State」のほかに、ノルマン語経由の「エステイト Estate」という言葉もあって、こちらは「身分、階級」のほかに、身分を保証する「財産」を意味する。これでわかるように「国家」の本来の意味は、「君主の位」であると同時に「君主の財産」だった。」（岡田英弘 2001、p43）のである。そしてこの「国家」という言葉は、明治日本人によって「都市の主人」が「国家」として訳されたものであり、「国家」ということばにあったもともとの意味ではないとも指摘している。「国家は人類の奇跡的な創造物である」ものとして、それが「けっして静態的なものではなく、動態的なものであることを確認する」必要がある（ブルデュー 2001、p24）。そのため、「国家」は歴史の　れにおいて通時的にみても、あるいは一つの時代の　面において共時的に　　しても　化と相異に　むものである。

では、中国において「国家」はいかに理解されていたのか。『説文解字』を調べてみると

【卷六】【口部】 國：邦也。从口从或。古惑切

【卷六】【邑部】 邦：國也。从邑丰聲。□，古文。博江切〖注〗挹、□，古文邦。

つまり、国は邦であり、邦は国である。これは、辞書編集によくみられる自己言及的な循環説明である。「国」、「邦」は同義であると理解してもかまわないように思われるが、しかし同じ言葉を『康熙字典』で調べてみるとつぎの通りである。

『康熙字典』【酉集下】【邑字部】邦

〔古文〕□□挹【唐韻】博江切【集韻】【韻會】悲江切，□音梆。【說文】國也。【周禮·天官】大宰掌邦之六典，以佐王治邦國。【註】大曰邦，小曰國。 又【釋名】邦，封也。封有功于是也。【書·蔡仲之命】乃命諸王邦之蔡。 又姓。【正字通】明有邦嚴。 又叶卜工切，音崩。【詩·小雅】以畜萬邦，叶上詡。【又】保其家邦。叶上同。又【大雅】御于家邦。叶上恫，凡《詩》《易》邦字□同此音。

ここでわかるのは、①邦は国であること、②邦は国より大きいこと、③邦は「封」であること、

④家邦として封じられた私有財産であることである。

『康熙字典』【丑集上】【口字部】國

〔古文〕口囹囹□▯【唐韻】古或切【集韻】骨或切，□觥入聲。【說文】邦也。【周禮·夏官·量人】掌建國之法，以分國爲九州。又【冬官·考工記】匠人營國，旁三門，國中九經九緯，經涂九軌，左祖右社，面朝後市。【禮·王制】五國以爲屬，十國以爲連，二十國以爲卒，二百一十國以爲州。【孟子】大國，地方百里，次國，地方七十里，小國，地方五十里。 又【周禮·地官·掌節】山國用虎節，土國用人節，澤國用龍節。【註】山國多山者，土國平地也，澤國多水者。 又滅人之國曰勝國。【左傳註】勝國者，絕其社稷，有其土地也。 又九州之外曰外國。亦曰絕國。【後漢·班超傳】君侯在外國三十餘年。【又】遠處絕國。 又兩國相距曰敵國。【孟子】敵國不相征也。 又外國來附者曰屬國。【李陵·答蘇武書】聞子之歸位，不過典屬國。【註】典，掌也。卽掌屬國之事者。 又城郭國，行國。【宋程大昌備北邊對】漢西諸　有城郭　有行　。城郭　城　者　行　不立城　以　上　。又姓。【姓苑】太公之後。齊有國氏，世爲上卿，宋有國卿。又国,《正字通》俗國字。

ここまで見ると、「邦」と「国」の差異が明らかになってくるのである。『康熙字典』の解釈からも、「国」の意味合いの変化がはっきりわかるのである。そして「国」の言葉は、①国、②市、③行政区分（五国を属とし、十国を連とする）、④都会（大国は地方百里、次ぐ国は、七十里）、⑤地理区分（山国は山が多い、土国は平地なり、澤国は水が多い）、⑥政治共同体（勝国者、その国の社稷を絶えさせ、その土地を有する、九州以外は外国と呼び、また絶国という）、⑦他者としての共同体（降伏した国を属国という）という使い方があり、その意味合いも時代のながれにつれて豊かになってきていることが確認できる。そして国家と国家の交流のなかで、国と国の相違が確認され、漢朝時代（前 202～220）には、「城郭」国と「行国」という区分が現れた。「城郭国」は、城を築いて守るものであり、「行国」は

城を建てずに馬の上で国がなされるものである。

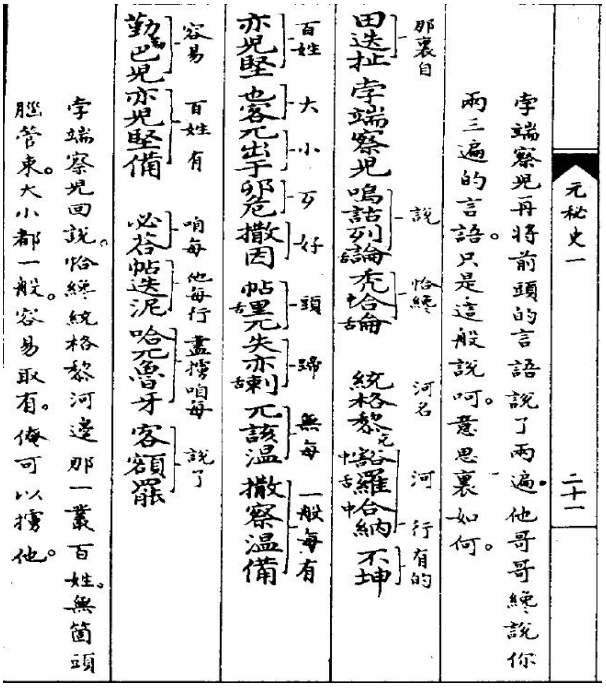
つまり、中国における「国」は、一つの城を指す言葉から発展して、都市を中心とした政治共同体を指す言葉となった。その使い方の変化にも見られるように、「国」は土地と切り離しては成立しえないものである。

4.2.2 行国 ―オルス([Ulus])

ヨーロッパや中国における国家の形態が、土地と深い関係をもつ「城郭国」であったのに対し、「行国」とは、城を建てずに馬の上で国を営むものである。「行国」は文字通りに理解すると「行き来する国家」である。それでは草原を行き来し移動する「くに」の意味するものをその語源から探ってみたい。

遊牧民の国家形態としての「オルス」の特徴は、一つが城を立てない、土地に縛られないことにある。そしてモンゴル語におけるこのオルスという言葉には、「国家」という意味のほかに、「人々」、「大勢の人」という意味があることに注意すべきである。意味的に近い言葉として「イルゲン」([Irɣen])、「クムス」([Kümüs]という言葉がある。イルゲンとは近代には国民という意味でつかわれている。クムスは、人々、人の多数格である。そして国を意味する言葉としてオルス([Ulus])のほかにグルン([gürün])、トゥル([Türü])がある。近代モンゴル語には、グルンは国家を、トゥルは政権、政府を意味するものとなっている。

では、モンゴリアの遊牧民の「行国」としてのオルスはいかなるものなのだろうか。オルスということばがモンゴルの経典に初めて登場するのは、もちろん『モンゴル秘史』においてである。オルスということばに入る前にそれと密接な関係にあるイルゲン(国民)という言葉を先にみたい。



（明訳『モンゴル秘史』）

05

（ 5 ）

『モンゴル秘史』の第五節を、那珂通世は「一日、ドワゴルは、ドブンメルグン奔干なるオトと不ブルカンダケの上ウエに上れり。ドワゴルは不ブルカンダケの上ウエより　みて、統格トングリクゴロカン（統格元史本記 統里トンギリフル 蒙古源 通格里トングリクフルン 呼歓）にシタガひ一ヒトムの民起タミタちていりて来　るを　みて見ミて」（那珂通世　1907、p4）と訳し、「イルゲン」の語を「民」とし、明初音訳本は「百　」とし、余大　訳注『蒙古秘史』は「人　」とし、那珂氏も場合によって「人　」と訳している。そして 35 節に　場するイルゲンは、チンギス・ハーンの 11 代祖先たるボタンチルの言葉から、そのイルゲンということばの所記がある程　理解できる。

それよりボドンチャルイ言はく「タダイマ今の統格トングリクガハに　る民タミは大オきチヒき悪アシきカシラヒメなくヒトシナミ等なり。タヤスき民タミなり。我等ワラは彼等カラをオはん」とイえり（那珂通世　1907、p19）。

「タヤスき民タミなり。我等ワラは彼等カラをオはん」の「イルゲン　民」とは、「大（主）」もなければ、「　（従）」もなく、悪、良の分　なく、そして　領なるものもなれば、　として使われることもなく、自由な人々であった。つまりこれらの「民」

を占領し、自分の領民にしようといったのである。明初訳本『蒙古秘史』には「俺可以　他」、余大　は「　　可以　他　全部　来」と訳している。これがチンギス・ハーン家のオルスへの始まりであるといえる。そしてこれらの「イルゲン」がボタンチルたちに　らわれてくると、イルゲンからボタンチル家の「ハラン」（合　[qaran]）、「トティハル」（使　合中行 [tudqar]）となった。それらを那珂はそれぞれ「家人」、「　使」と訳している。原文は「帖那　百　格行　合毎　兀　毎　5個　不兀　倒兀里周　　額処　人　口　使てき　合中行　過活　住　行　撤兀　古　了」[4] である。ハランは[qaran]であり、元々黒という意味だが　統治　　に属する人々を指す　合名　である。この語は、のちに民、　民を意味する「ハラチォ」（［qaraču］）と　化していくのである（　金　1998）。13 世紀のモンゴル語は、語　に[　]がついて、名　を形成するのであった(М.Н.Орловская 1984)。この場合の語　は「　」[qar=a]である。同じく　という意味の「　　」（ [aduɣun]）ということばも現代モンゴル語においてはその語　の「　」が消えて、「アドー」（[aduɣu]）という形になっている。そしてこれらの「ハラン」は、「オーゴン・ボグル」（　）と呼ばれ、モンゴルの　族　　をなす　となる。

まず草原の遊牧民にとってオルスへの第一　は、領土　　ではなく、「ハラン」なり、「トティハル」なりの　　から始まるものであった。そして、モンゴルにおけるオルスは『モンゴル秘史』では、第 53 節に初めて現れる。そしてそのオルスは、「ハムグ・モンゴル」（　[Qamaɣ Mongɣol]）と称するものであった。

全モンゴル（ハムグ・モンゴル　）を統治していたハブル・ハーン（　［Qabul qaɣan］）は自ら自分の　を　ぎ先に　って行ったが、タタル部につかまり、ハラ・　タトのアルタン・ハーン(金朝皇帝)に　されてしまう。そしてハブル・ハーンは、金国によって　の　　の　[43]に処されるが、その　に「合(カムクン)合(カガン)（き大、すめらおほぎみ）、国(クニ)の主(ウシ)人となりて、女(ムスメ)を自(ミカ)ら(オク)れることを我(ワ)により(イマシ)めよ」（那

珂通世 1907、p32）という　告を残した記録がある。「合（カムクンカガン）合」は、ハムグ・モンゴル（全体モンゴル人）のハーンという意味である。ハムグ・モンゴル（全体モンゴル）の原文は「合（ハムグ）黒・（モンゴル）」であり、那珂の　注は「　・　」である。ただ、ハブル・ハーンが統一したのは、モンゴルのなかのニルーゴン・モンゴル諸部と一部のデ　ルン・モンゴルにすぎなかったが、しかし、ハブル・ハーンの時代には、ハムグ・モンゴルという意識が生まれ、自らの　を「ハムグ・モンゴル」と自称するようになっていたことが確認できる。この強力な「われわれ意識」は、ハブル・ハーンがアルタン・ハーンに　されたとき、その　のためにハブル・ハーンの　であるハダンが 13 回にわたり攻撃を行ったほどのものであった。この　はモンゴルの統治権がイェスゲイ・　ートル　チンギス・ハーン家に　ったあとも続けられ、タタル部の消滅と金朝の滅　をもって終わった。

和　哲　は原始国家の成立についての考　し、シナルにおける　に強い「　国家」も、エジプトにおける「　国」も共通の特徴として、「シナルの地においても､エジプトと同じく､氏族のごとき　体の　は見出す事が出来ない」(和　哲　2007、第四　p60)と述べている。「　国」は、地　の統一としてエジプト語では「ḥsp」と呼ばれ、ギリシア語では「　モス」と訳されたものだが、日本の「くに」に近いものであった(和　哲　2007)。「　国」は地　の統一として、その　部組　が　に地方的な土地の組　であるに対し、「　」国家は、　を中心とするものであった。これらの「人　組　」としての共同体の組　は、土地を　とした。しかし､モンゴル高原における遊牧民の国家としてのオルスは、土地と強固たる結びつきをもたなかったが、　関係に基づいた氏族連　の性を持っていた。もちろん、　丹人の　朝、女真人の金朝は、「国家形成の　」を通して中国文明のなかに　け込んだが、モンゴルをはじめとする中央アジアの遊牧民族は　化を　否し、「　型社会」に　っていった(Toynbee.A 1974)。「

型社会」に　ったという　定に表わされているように中央アジア遊牧民が草原の　々を　　して　った「行国」オルスは　大な　　を　ったが、近代国家につながることに成　している。この生命力がオルスの基　をなす「人間」にあり、土地を基　に固定する社会にくらべると、不定期的に不特定の方　に　かってきまわる人間　　をオルスとして統治するには「城郭国」あるいは「　国」、「国家」よりさらに強固たる結びつきの在り方が必要であったことは　　するにしくない。

そのため、「国」の言葉が日本語では土地と結びつくのに対し、モンゴル語では、人と結び付くのである。

> モンゴル語において「国」を表わすことばは「オルス」である。同時に「オルス」は、「人々」という意味にも使われることばである。漢字では国（　）は「くにがまえ」と呼ばれる　いが付いており、いかにも　の中に存在するものである。日本語においても「くに」ということばは「国」、「邦」と書かれ、「お国言葉」のように土地をあらわす表現である。しかし、モンゴルは人と結びつくのである。　をあらわす「アイマク」にしてもやはり人と結びつく（荒　　2006、　10）。

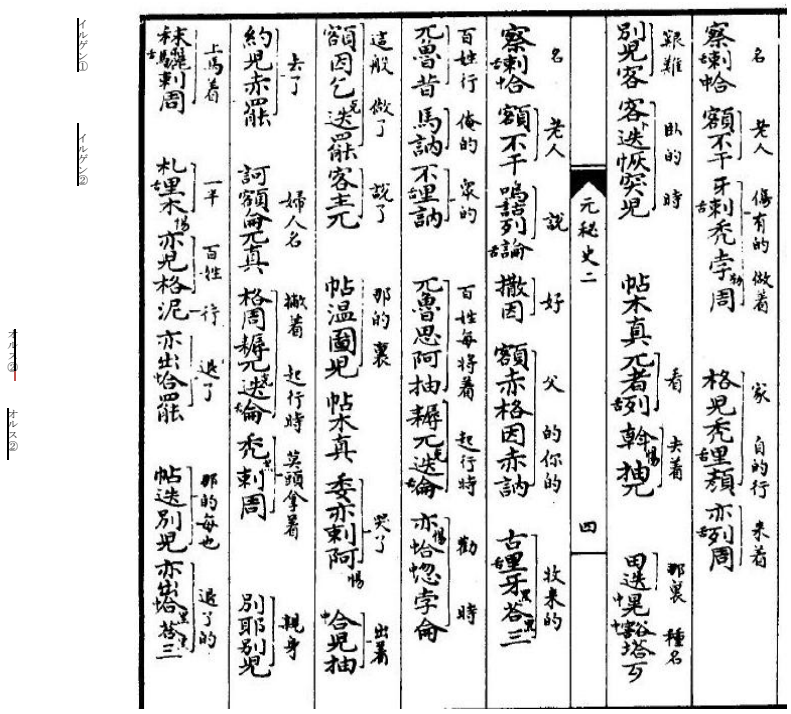
荒　　も指摘しているように、オルスは「人々」を意味する言葉でもある。ここまでは、オルスが国を意味するものとして考　を進めてきたが、ここからは「人々」をあらわす　面について見てみたい。

まず、文字記録としての『モンゴル秘史』の第 73 節にある記述を、那珂通世は次のように訳している。

> 合（チャラカオナ）　　となり、家（イエ）にきて　（ナヤ）み　（フ）せる時、帖（ト）真見（テムジンミ）に　（ユ）きけり。そこに　（ンゴタン）の　合（チャラカオナイ）　言はく「　（ナン）の　き（チ）の　めたる部（ブシウ）、我等（ワラ）のあ

またの部を率　て起たる　時、めんとしてかく為されたり」と　ひき。その時帖　真　きて出でて　れり。　額　兀真は　てて起たれたる時、（蒙　黒は白　の　長の　を　にして　に繋げたる者）持ちて、　づから　に乗りて、半の民を取　せり。その取　せる民も、定まらず　兀　の後より起ちけり（那珂通世　1907、p50）。

チンギス・ハーンの　イェスゲイ・　ートルがタタル人に　入りの　を　まされて暗　されたあと、モンゴルの統治権を　兀　部が　っていた。イェスゲイ・　ートル家の勢力を　　した　兀　部は、　いテムジン一家を捨てて、



することを決めた。そしてテムジン一家のイルゲンが勢力ある　兀　部の保護を求めて、そのあとを追って　　を始める。引用の部分はこの時の描　である。

場する　ン　ダイ族のチャラハ　人は、テムジン一家を見捨てて　　するイルゲンを説　に行って、　兀　部の人に　られ　　した。ここで見られるように、定住型社会において、いらないものを国外に追　するが、遊牧民の「行国」オル

スでは、要らないものを捨てていくのである。『モンゴル秘史』に記録されているチンギス・ハーンと草原の勢力者ジャムハの分　も、　　の　に発生したものである[44]。

那珂通世は、上記の引用文（モンゴル文原文にある　当名　に　号を付けて強　していた）において、オルス①とオルス②を部　、イルゲン①とイルゲン②を民として区　して訳している。第 35 節で　場したイルゲンということばは、主従の　　なく、　と　が同じく自由な「　　き民」であった。それに　べるとオルスは「人々」という意味で　数の人を指す場合、それはある程　の政治性をびるものである。明初訳本『蒙古秘史』では、オルス①、オルス②を「百　」、イルゲン①、イルゲン②を「人」と訳した。余大　はすべてを「百　」と訳してしまっている。三つの訳本を見ても、オルスとイルゲンは、　数の人を指すことばであるが　　にニュアンスが　っており、　訳する者に　　を強いる。国家としてのオルスは、このように「人間」に結び付けられているのである。荒　氏が　に　げている「アイマグ」（　［aimaɣ］）が　の意味を有したのは、近代になってからのものである。清末までには、「　シュー」（［qusiɣu］）、つまり満州の軍事行政　位である　という語が　に近い意味で使われていた。アイマグは『モンゴル秘史』では、氏族あるいは、一人の　領に属するイルゲンの　位のことである。その第二の意味がモンゴル国で近代行政　位として使われ、　を意味するものになったのである。この意味で言うと、アイマグは人々を指す　位から、地方　位を指すことばに転　したのである。「行国」オルスが近代国家の範に　って適応したあらわれといえよう。一方、中華人民共和国では、モンゴル・オルスから残ってきたこれらの名　は　　化改　によって一　された。たとえば、ジリム・アイマグ（ ）が通　　に、ジョーオダ・アイマグ( )が　　に、フルンブイル・アイマグ（　）が　拉尓　などとして、姿を消した。

ここまでに、オルスという遊牧民の国家形態の特徴について考　してきた。本

研究では、中央アジア遊牧民の　　する国家としての「行国」オルスという歴史的視点を導入することで、14 世紀以降におけるモンゴル民族アイデンティティを再考する姿勢をとる。　連のチュルク学者ウィル　ルム・　ルトリド（Wilhelm Barthold　　尔　　1869-1930）[45]、ウラジミルツォフロツォフ、　田（1882-1955）などの学者たちの研究業績によって、その遊牧国家の国家形態の特　性が注目され、定住型社会との相　が主張されてきた。和　哲　は風土学から「　漠的人間の　績は人類に人格神を与えたことにおいて　　に　する（強は原文による）」と、遊牧国家「行国」の成り立つ　理根　を　く指摘している（和　哲　2007a,p68）。これらの研究業績はモンゴル民族のアイデンティティへのアプローチに「行国」という古くから注目された視点の重要性を改めて促すものであるといえる。

また、本論文で用いる四部の編年史の基本　　は、次の通りである。

一、 17 世紀の初　に編纂された、著者不明『アルタン・トブチ』（　altan tobči ）　フルタイトルは、『モンゴルのハンたちの根源を　略にまとめあげた黄金の概要』（　　[mongɣol-un qad-un ündüsün quriyangɣui altan tvbči]である。本研究では、1915 年の北京　を　うのである。また、本研究では、四にあげているロブ　ンダンジンの『アルタン・トブチ』と区し、混乱を　けるために、　林高四　に従って『蒙古黄金史』とする。

二、 1662 年に編纂された　ガン・セチェン・　ンタイジ（ [Saɣang sečen]）の『蒙古源　』（　erdeni-yin tobči ）　フルタイトルは、『ハン等の根源の　石の概要』（　[Qad-un ündüsü-ü Erdeni-yin tobči]）である。本論文では、内モンゴルの学者メ　ゲン　ートル（ 尔根　　尔）が 1962 年に出　した、内モンゴル自治区・アラシャン　アラグ　　ルデ（　　）で発見された　本を用いる。また、『四　全書』に　録された漢語　も　照することにする。本論では、『蒙古源　』と略す。

三、 著者不明の『シャラ・トージ』（ [sira tuɣuji]） フルタイトルは『古のモンゴ 1581 ルのハン等の根源・大黄史』（ [Erten-ü mongɣol-un ündüsün-ü Yeke sira tuɣuji orosiba]）である。これは、1630 年代に書かれたとされている[4] 。本論では、『シャラ・トージ』という呼び方に統一する。

四、 ロブ ンダンジン（ bLo bzanń bsatan ‘jin ）『黄金史』（ [altan tobči]） フルタイトルは、『古のハン等を根源とする政治の由の著作を 略に めた黄金の概要というもの』（ [Erten-ü qad-un ündüsülegsen törö yosun-u jokiyal-i tobčilan quriyaɣsan altan tvbči kemekü orosibai]）である。書かれた年代については諸説あるが、17 世紀後半に書かれたという説が有力である[4] 。本研究では、モンゴル国の学者SH・ ラーが 1990 年に出 した 真 を 用するのである。本論では、『アルタン・トブチ』、場合によってはロ『アルタン・トブチ』と呼 ことにする。

『アルタン・ハーン伝』のフルタイトルは、『 の結 という名の伝記』（ [Erdeni tunumal neretü sudur orosiba]）である。『アルタン・ハーン伝』は、1607 年に書かれた詩の形をした伝記である。モンゴルのアルタン・ハーン（1507 の なる女の 年-1581 白い巳年)の生 、特にアルタン・ハーンがチベット仏教をモンゴルに導入したところが詳しく書いてある。アルタン・ハーンは、漢籍には「俺 」、「 王子」、「順義王」と記録されている。アルタン・ハーンは、フフ タ（現在の呼和 特 、明清は、帰化城と呼んだ）を建立し、農業を導入するなど多くの改 を行い、明朝との和 を実現させた。

ハルハ・モンゴルの イン ヤン・アイマグのシャム ・エルケ・ダイチン（ [Šamba erke dayčing]）によって編纂された年代記で、フルタイトルは、『ア ラグチという名の歴史』（ [Asaraɣči neretü teüke]）である。ア ラグチは、チベット語のジャム [byam-pa]であり、「 」（maitreya）を意味する。著者のシャム は、ダヤン・ハーンの子、ゲ センジェ・タイジの六世 である。清の 帝が行ったオイラト・モンゴルのガルダンを征服する 征に同行し、 績が大きかったため、 シュー親王に じられた。

[3] 『清実録』太宗文皇帝実録巻二十四の 九年八月（1635 年)、モンゴルの最後の皇帝リンダン・ハーンの息子が「 之 」と書かれた大元オルスの「伝国の玉 」を献上して、満州清朝に降伏したとある。満州はこのことをもってモンゴル・オルスの滅 を宣言したが、モンゴル全体を征服するにはさらに 100 年を要した。

[4] 含編『朝鮮李朝実録中的中国史料』第一　　249　「高麗史」「成宗荘憲大王実録三」の壬戌二十四年の　条。

[5] 含編『朝鮮李朝実録中的中国史料』第一　　249　「高麗史」「成宗荘憲大王実録三」の壬戌二十四年の　条。

　　編『朝鮮李朝実録中的中国史料』第一　　22　「高麗史」「　　王」中華書　、1980。

元　宗トゴンテムルの年号。

ラシプンスク（［Rasipuŋsuɣ］）内モンゴルの　ーリン　（　［baɣrin husigu］）出　で、ダヤン・ハーン（在位 1470-1543）の第五子アルチュ・ボロトの後裔とされる。その　は清朝　清　行走であった　ルジュル（［Balǰuur］）であり、「　ーリン　軍王　　理三等　吉」と自称している。18 世紀　半から後半にかけて活　していたモンゴル知識人であり、漢語、満州語、チベット語にも通じていたといわれている。『ボルル・エリケ』は、「元史」、「資治通　」などを　用しており、またモンゴルにおける北方遊牧民族の風俗　　を　教の立場から　く批判している。

「伝国の玉　」とは、中国の皇帝が皇帝の座に　くのに必要とされた国　である。「　」は、　　の『説文解字』に「　、王者　　」とある。元・　宗　の『南　　耕録』(中華書　　1959) によると、中国には二つの「伝国の玉　」があった。一つは、三代（　、　、　）以　に伝わっていた「伝国の　」と称されるもので、これについては詳しい記録は残っていない。もう一つは、秦の始皇帝が作った「受命　　、　昌」の八字の玉　である。大元オルス最後の皇帝トゴンテムルが持ち　ったのはこの「受命　　、　　昌」の玉　であるといわれるが、各歴史書の記録によってまちまちであり、モンゴルの編年記では、チンギス・ハーンのモンゴル帝国の玉　を持って逃げ出たとしている。その由来は、　和が「和氏　」と称される有名な玉石を見つけ、それを楚国に献上したことに始まる。楚はその玉石を　　し「和氏　」にした後、　　のお　として　国に　った。秦国の秦昭王が十個の城をもって　　を　んだがわなかったといわれるほど有名な玉であった。後に秦国が六カ国を滅ぼしたあとそれを　に入れ、始皇帝が李　に　文を、玉の　人　　に　刻を命じてつくらせた。秦二代皇帝・　が　　にて玉　を　邦に献上して降伏した。　邦は玉　を　に入れて漢朝を建てた。王　が漢朝皇位を奪った後、漢太　に玉　の献上をせまり、漢太　が地面に　げ捨てた結果、玉　の一　が　ついたといわれる。漢末に　　が　乱を起こした　に、玉　を　理していたものが玉　を　　に捨てた。　　に捨てられた玉　を　　が見つけ、　を建て、三国時代に入る。玉　が　　から　術に伝わり、　術から　昌にいた漢献帝に　られ、そこで　　の　に入る。　　の後裔による　朝が　に滅ぼされ、玉　が　にわたる。南北朝（317　581）を通して、宋、　、　、　諸国に所有され、　朝が　を滅ぼしたあと、　の　太　が玉　をもって　　に入る。その為、　朝は「伝国の玉　」はなく、またそれに次ぐ唐朝も唐太宗の　観四年に　太　が　から玉　をもって降伏するまで「伝国の玉　」はなかった。五代十国（907　979）時代には諸国が奪い合ったあげく、後唐の末代皇帝珂が玉　を　にかけて　　し「伝国の玉　」は行方不明となった。女真人は中原を占　後に金朝をたて、北宋が新たにつくった「伝国の玉　」14 種をすべて奪った。モンゴル人が 1234 年に金朝を滅ぼし、「伝国の玉　」を　に入れ、フ　ライは、1271 年にモンゴル帝国を「大元」と　えた。元始祖フ　ライは、「受命　　、　　昌」の玉　を　に入れることがなかった。至元 31 年、漢人　相徐　があるモンゴル　軍の家から見つけ、ウルジート・ハーン

成宗皇帝（元世祖フ　ライの　）に献上したと『元史』、『新元史』、『明実録』に記録されている。
明朝が「伝国の玉　」をモンゴルから奪いもどすことができなかったことについて、　　は「玉　　ンプ　ックス」と名付けている（　　2005）。

何高　は元朝の統治範　が北　　に　していたとみている。その理由は次のようである。『　　行紀』（the journey of Het'um　king of Little Armenia）は、アルメニアの　ッタム王が中央アジアを　　し 1254-5 年にムンケ・ハーンに　見のためにモンゴルに赴いた　を乞剌可思・剛札克賽（Kirakos Ganjakeci）が記録し、『アルメニア史』に残した。この　行記録に、「　国」の神話が記録されている。「女は人間の姿をして、理性的かつ　明であるのに、　性は　の姿をし、理性が欠け、そして体が大きく、　が生えている。　は他人がその国土に足を　み入れることを　せない。彼らは　をし、彼らと女性たちはこれを生計としている。　と女性が　じって、生まれた子供は　性は　の姿、女性は女の姿になる」（　　行記 1981、p21）。「　国」について、『黒　事略』は、蒙古の東北に「那　　律子」があると記録している。注釈に「つまり　国なり。　は　が　の　き、　に　が生え、　く　さが走る　さに　び、女性は　しく、　が攻めて　てなかった」とある。「那　　律子」は、「　ハイ・オルス」であると考えられる。モンゴル語で「　ハイ」は　であり、「オルス」は国、つまり「　国」である。『元史』「世祖本紀」に「造　百　、付　国戍軍」とあり、何高　はこの「　国」は、イ　イットであり、1284 年には、元朝の統治範　が北　　に　んでいたとみている。

三教立国は、仏教、　教、　教をもって国家　　を整え、統治をおこなうという理　。おもに　学者らが提言したものであり、　体的に言うとその代表的な人　は次の通りである。たとえば　律楚　、　乗　など　教学者は、チンギス・ハーン時代からモンゴル帝国の　　的建設に　　していた。　律楚　は　教、仏教を　せ持った帝国　　の成立に最も影響力のあった人　である。また　教からは、長　真人・　処幾がチンギス・ハーンに　まれ、チベットからは　ス　ラマとその　　グンガジャランおよびカルマ・　グシをはじめとするチベット仏教徒と中国仏教の少林　の主持である　　長　らが「長生　」を　るものとして多くの影響を　ぼした。のちに　教全真　と仏教の間に発生した二回にわたる「　子化　　」、「　子八十一化　　」をめぐる大論　がモンゴル帝国で行われ、仏教と　教の連合が　教に対し　倒的　　をおさめ、中国において仏教が　倒的地位を　　したと同時に、モンゴル帝国末期のモンゴル統治　　が諸宗教を「　等に　う」態　から仏教に完全に　くきっかけともなった。

フ　ライ・ハーンは、1260 年に自　の勢力を　めて、現在の内モンゴルにある　　で大クリルタイ（　［yeke quraldai］）を　　し、イケ・モンゴル帝国第五代ハーンに　出された。同時に帝国の　　カラ　ルムでは、アリクブガがハーンに　出され、四年にわたりハーン位を　って　った。帝国四代ハーンであるモンケ・ハーン時代に漢中を領有地としたフ　ライは　　に　って、正　に帝国のハーンになった。アリグブガが　られたあと、　　諸王と　　の一部の諸王たちの連合は、フ　ライに　をひるがえし続けた。帝国二代代ハーンであるオゴデイ・ハーンの　カイド（［Qaidu］）と、チンギス・ハーンの異　　べ　グディの　ナヤン（［Nayan］）は、チンギス・ハーンの長　ジュチ（［juči］）の後裔たちの支　をえて、1287 年までフ　ライと　っていた。そのため、フ　ライは、ハーンを　出する大クリルタイは必ずケルルン　オ　ン　にあるチンギス・ハーンのオルドで行うという　しい伝統にしたがい、また大　（北京）に　　を置きながら、大　、上　、カラ　ルムのどこにでも即位できるとした。また至元 29 年に元世祖フ　ライ・ハーンは、　のガマラに金

をあたえ、　王（ジ　ン［jinung］）の称号に　じ、「太祖の四大オルド　び軍　、　国全　を統治させた」（元史）。これにより大元オルスの皇位を継ぐには、カラ　ルムに任命される息子がそれを受け継ぐことになった。またジ　ンは、チンギス・ハーンの「八白室」(　　［Ejen-u naiman čaγan ordu］)の祭祀を　るようになった。元朝皇帝は、モンゴルの　　と中国を行き来し、『朝鮮李朝実録』に記録しているように「すべての政　は中書　に任され、元朝滅　の原因となった」のである。

[3] 元朝皇帝一

名前	モンゴル称号	中国廟号
① 忽必烈	① セチン・ハーン	① 世　祖
② 鉄木耳	② ウルジート・ハーン	② 成　宗
③ 海山	③ フルグ・ハーン	③ 武　宗
④ 愛育黎拔力八達	④ ボヤント・ハーン	④ 仁　宗
⑤ 碩徳八剌	⑤ ゲゲン・ハーン	⑤ 英　宗
⑥ 也孫鉄木児	⑥	⑥ 泰　定
⑦ 阿剌吉八	⑦ ジャヤート・ハーン	⑦ 天　順
⑧ 和世	⑧ ホトグト・ハーン	⑧ 明　宗
⑨ 図帖木尓	⑨ ジャヤート・ハーン	⑨ 文　宗
⑩ 懿磷質班	⑩ イリンチンバル・イルチマル	⑩ 寧　宗
⑪ 妥歓帖睦尓	⑪ オハント・ハーン	⑪ 恵　宗

[4] 原文は
長生　　力
大　　護
皇帝　旨行中書　、行　史　、行宣政　　人毎根　、宣　　人毎根　、軍毎根　、軍人毎根　、城子　　人毎根　、　来的使　毎根　、百　毎根　、
　和　毎根
　宣　的
　旨
成吉思皇帝
月　　皇帝
　　皇帝
完者　皇帝
　律皇帝
　　皇帝
格　皇帝
　　皇帝
　　皇帝
　　真　皇帝　旨　、和　（仏教　　）、　里可　（　リスト教　　）、先生（　教　）毎、不　　（華夷訳語通用　には、　里　、　　としている。つまり　　をさす）　発
　　告
　　者　　説有来、　今　　在先
　旨体　　不　　発　　告
　與
　毎　　者
　　皇帝教起　大　　的時分、　　清　体　行者　　行
　旨有来、　西　與　百　大　　照　　在先立来的清　体　、近年以来各　　、　那

清　体　　不一了。有　今教百　　大　　住持　　長　重新編了。
教大　　長　為　、　有本事的和　、　生　正帰一者、　那各
来的不一的清　教行、　這　正帰一的清　体　、定体行者
的
旨與了　。這的每　房　、使　每　安　者、　応　者、　者。
属　家的　土、　林、人口　、　、　、鮮典　、　、　、　場、
、　等不　、是　奪要者。　力者這般
宣　了　、　了的人每、要　過者更這的每有
旨　没体　、他每更不　那
旨
元統三年　年　月十八日上　有時

5　［darugači］　、元朝時代に各地方行政　関に　された行政長　。

原文は「成吉思皇帝」である。『華夷訳語』「人　」では、「皇帝　合中汗」である。「合中汗」は、［Haɣan］であり、モンゴル語のハーン「」を漢字で表記したものである。

ラマ教における三つの世　の一つ。人間が住む世　である。

（明）　、大　・王　有主点　『国朝典章』北京大学出　社、1993p43。（　略）　は　からの出で、　を　め　起し、長　の　に基　を　き、　軍たちに命じて四方の非なる朝　を征服し、その中、西に漢の主　を　定し、東には　の王張　を降伏させ、南に　建広東を　定し、北には　（現在の　北　北部と　南部あたり）　（　北　）を清　し、華　を安定させ、わが中国の　領土を回　した。　は、　民に　戴され皇帝の座に即し、　を定め大明と号し、元号は洪武を建て、外夷に使者を　し、　の意を伝え、使者が　くところ、　夷の　長みな、　として年貢を　めている。

『華夷訳語』「人事　」には「　」としている。漢籍には、モンゴルを　、　、　などと表記するのは多くみられるものである。

朱　祖「後金国汗　氏考」『中央研究　歴史言語研究所　外編第一種上　』1933 年。「自元入中原、始以　象之名　為建国之名号。　清太宗之称「清」、実為有意識之摹　、　彼　蒙古之統一中国、　滅外族　吞之色　」。

『万歴野　記』の記録によると、朝　に保存されている「文皇帝四　」に描かれた風景は、文皇帝が北へ　征した時、その乗っていた　が　の　に　された　、さった　を抜き取った四人の　軍を描いたものであるという。その四人はすべて「　軍」、つまりモンゴル　軍たちであった。一　は、「竜　」という　で、　のいの　に　。　を抜き取ったのは、「　軍」　だった。二　目は、「　」という　で、白　大　の　に　し、　失帖　が　を抜き、三　目は、　が　の　いの　に「　」という　の　を抜いた。四　目は、　という者が　の　いと　の　いの　に二　にわたり文皇帝の「黄　」に　さった　を抜き取ったという。

1980 年代以降に　南、　建等の　に大元オルス時代に取り残されたモンゴル族であるという　、　が現れている。有名な学者である　は、大元オルス時代のモンゴルの後裔であるという　が中華民族の形成史によく出る　である。しかし、500

年後にそのモンゴル人であるというアイデンティティがいかに確認されたかは、 のままである。

[3] モンゴルに関する通史などのなかで、 な態 をとる学者は、この時期について言葉を しむことが多くみられる。日本の 子、イギリスのデイヴィド・モーガンなどの学者の著書の中でもこの時期に関する記述は 足りないように感じる。むしろ、「明代蒙古」、「北元」として論じるほうがわれわれが に持っている史料を有効かつ安全に 用できるのである。

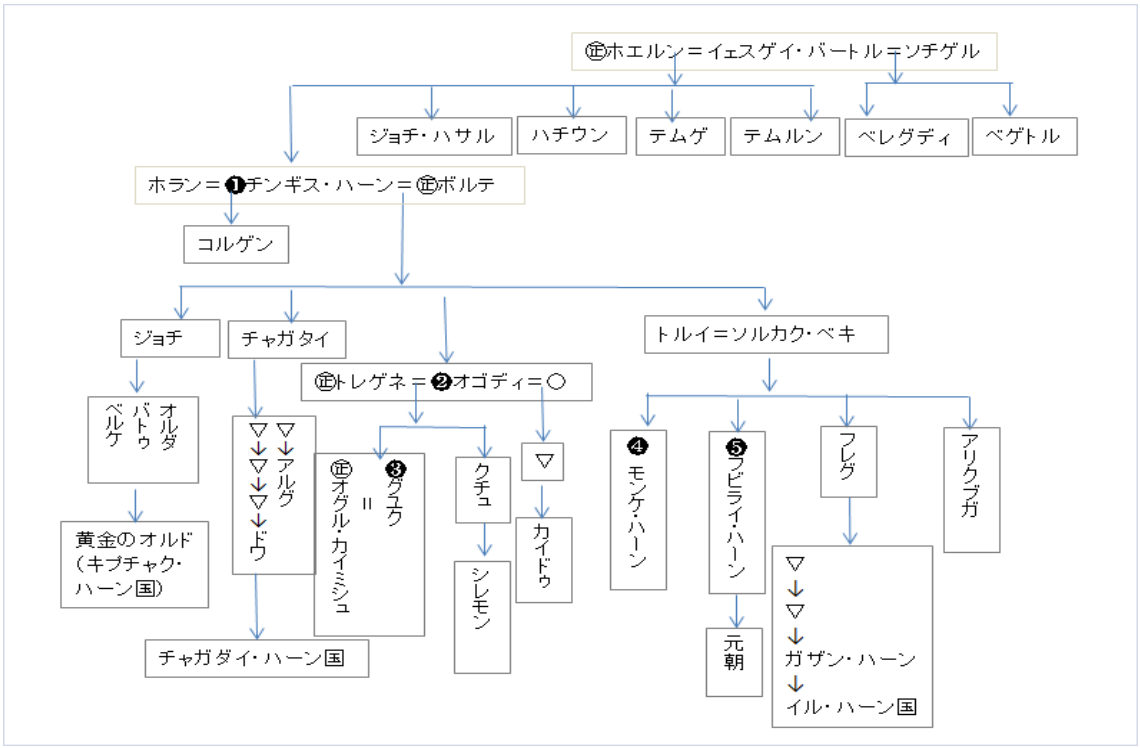
[4] 大 (1532-1612) 字 、号は 。 東 安の人 。 四十一年 (1562) に進 に合格し、 次 に任命され、のちに 西 政、 順 、宣 順 、宣 大 西総 などを歴任し、 部 書に至った。明朝の北辺 の要 に長年 めた 大 は、モンゴルの に詳しく、 元に めた資料をもとに『北 風俗』(または『夷俗記』という) という大 重な歴史資料を書き残した。全書は、「分配」、「生 」、「分家」、「治 」、「治 」、「 訟」、「 埋」、「崇仏」、「 」、「 」、「耕 」、「 用」、「 」、「 上」、「 」、「牧 」、「 」、「教 」、「 」、「貢 」から成り、またその付録とした「北 世系」は、モンゴルのダヤン・ハーンの後裔、その子 代までを詳しく記録し、その名 、遊牧地、生 などの情報を記録している。モンゴル歴史家たちの編年史は、民族的感情、「アルタン・オルグ」(黄金家族) への期 と仏教至上を特徴としているが、 大 の記録はモンゴルの社会生活、生 分業 に重点を置いた点で非常に 重な資料である。

[5] 薄音湖、王雄等編集『明代蒙古漢籍資料汇編』(第二集) 内蒙古大学出版社、2006 年、p 242。

編『朝鮮李朝実録中的中国史料』第一 27 「高麗史」「 王」中華書 、1980。

『明史』「外国八」「 」、中華書 、8467 。

アリグブガ、([ ] 里不) は、チンギス・ハーンの末子トルイ ([Toloi]) の息子。元世祖フ ライ・ハーンの である。フ ライとモンゴル帝国のハーン位を い、モンゴルの を根 地としたアリグブガは、中国華北地方をすでに に入れていたフ ライに れた。1 年あまりの後に、アリクブガの後裔がフ ライの後裔からハーン位を奪い取ったといわれるものである。また、元の 宗トゴンテムルが明におわれ、モンゴルに逃げながらも、漠北に入ることを ったのも元朝皇帝たちの中国化に強い 対をもつアリクブガの勢力を したからである。和田清の言葉を りると、「 し中原を はれた元室は漠北にも に一 を えてたのである」(和田清 1943 3)。モンゴル帝国の世代系 は次のようである。



（㊨のマークのついたのは、第一夫人である。❶のマークはモンゴル帝国のハーンの位についた順位を表わすものである。）

建国初期に　元朝を滅ぼした時、太祖は大　軍徐　に命じ、その秘　に所蔵された　書伝籍など、すべて金　（南京）に　させた。また勅　を出し民間に残された書　を　め、宋の時代の刻　本を一　から十　をもつものもいた。太宗は　　を　　（北京）に　し、南京に所蔵された書　を　　よう命じ、一　の本ごと一部を北に　　させた。　　19 年には、初めに　順　に保存し、正統 6 年に文　　に　入し、出入りを　　し、　代と同じくした。正統 14 年、　宗北　を　り、南京に所蔵の諸書が大　に　い、宋元以来の秘本すべて、一朝にして　きる。その後北京に　蔵された書も、立　な　　に置かれながらも、　　で充ち　れ、巻と　のみは元通り残っていた。　政以降、　　とも、追　するものなくなり、徐々に　失し　きた。「国初　元時、太祖命大　軍徐　、　其秘　所蔵　書伝籍、　解金　。　　求民間　書。時宋刻　本、有一書至十余部者。太宗　　、始命取南京所　書。始命取南京所　書、毎本以一部入北。時　　十九年　。初　在　順　北　、至正統六年　入文　　中、地　　、事同　代　。至正統十四年、　宗北　、　南京所存内　諸書、　　大　、　宋元以来秘本、一朝　　。自後北京所　、　置高　、　　、巻　　。自　政以後、　　、無人間　、漸以　」（元明史料　記　　（明）　　『万野　編』中華書　1997 年再　第 04　）。

[3]　モンゴル・オルスのハーンの一

名前	称号	読み	在位
トゴンテムル	オハント・ハーン	uqantu qayan togontemür	1368– 1370
アーユシュリダ	ビリグト・ハーン	biligtü hayUsqal qayan	1371-1378
テクステムル	オソハル・ハーン	Usqal qayan	1379-1388
イェスデル	ジョリグト・ハーン	isdel ǰoriγtü qayan	1389-1391
エンケ	エンケ・ハーン	Enke qayan	1392-1394
エルベグ	エルベグ・ニグレスグチ・ハーン	Elbeg nigülesügči qayan	1395-1399
グーンテムル	トホーハン・ハーン	toqohan qayan	1400-1402
グイリチ	グイリチ	güiliči	1403-1407
ビヤシリ	ウルジェイト・ハーン	öljeitü qayan	1408-1410
ダルバグ	ダルバグ・ハーン	dalbay qayan	1411-1415
オヤルディ	オヤルディ・ハーン	oyiridai qayan	1415-1425
アダイ	アダイ・ハーン	adai qayan	1425-1438
トドボハ	ダイソン・ハーン	dayisung qayan	1439-1451
マハグルギス	ウゲグト・ハーン	ökegtü qayan	1452
イェソン	イェソン・ハーン	Isun qayan	1453-1454
モラン	モラン・ハーン	molan hayan	1453-1462
マンドグル	マンドグル・ハーン	manduγul qayan	1463-1467
バヤンモンケ	バヤンモンケ・ハーン	bayanmüngke qayan	1467-1470
バトムンケ	ダヤン・ハーン	batumüngke dayan qayan	1470-1517
ボディアラグ	ボディアラグ・ハーン	bodi alay qayan	1544-1547
タレイソン	タレイソン・フデン	dalaisun qayan	1548-1557
トゥメン	トゥメンジャサグト・ハーン	tümen ǰasaγtü qayan	1558-1592
ボヤン	ボヤン・ダユン・セチン・ハーン	buyan dayun sečin qayan	1593-1602
リグダン	ホトクト・ハーン	liγdan qutuγtu qayan	1604-1634

[3] ウルベルゲテン（［Örbelgeten］）は、『チャガン・テウケ』に「9代 シューン軍を統 し、 な心をもち、 心を れず帝国を護り、人民を的から ることができ、大いに貢献したものは 子にフクロウの を し、三 を領有するハ ハの称号を与える」（p98）とある。 金 注釈(1981)『 十 白史 』内蒙古人民出 社 照。

[3] ロブ ンダンジンの『アルタン・トブチ』では、オトグタン([otoγtan])と られている。その語源のオトグはト メンを構成する行政 位であり、オトグ長という意味であると される。「ミンガン千 長」にあたる。「61の のある者」は、「ヒリチ [hhirči]」、つまりウルベルゲテンの親 である。 金 注釈(1981)『 十 白史 』内蒙古人民出 社 照。

[33] ナン・セチン『蒙古源 』では、オイラト・モンゴルのアブドラ・チチェンたちは、ハーンが を ったゲルに入る を い始め、ハーンをはじめに を まって し始めたと記している。そして、三十三人の の った を しているところで、ハラ ツォグ・ 吉（［qarγvčaγ taiǰi］）はゲルの中の異 に が付き、イナグ・ヒラー（［Inaγ qir-a］）という 使を使ってみせるとゲルの から が れていた。事態の さを分かって逃げ出たハラ ツォグ・タイジはトクムグ([Toγmog])の国で されるが、当時、その未 人のおなかに三カ月だった息子がのちの ヤン・ムンケ・ハーンとなるのである。

[34] 「ロシヤのモンゴル人帝国にイスラム教が広まった。十六世紀初めには、そこではモンゴル文化は れられ、モンゴル人支配は崩壊した。権力 いはすでに十四世紀にイランにおけるモンゴル人統治を させた。ここでもイスラム教への 行がモン

ゴル人の在り方を　え、十四世紀末にはその支配はすでに終わりを告げた」（ハイシッヒ 1967p58）。これらのかつてモンゴル人による　大な　　を受けた諸国は、モンゴルに対する　　を　れることはなかったと考えられる。明朝による　　包　を受けたモンゴルは数回にわたり西へ　征を行ったが、西へつながる　を作りだすことができなかった。

[35] ラシード・ウッディンの『史　』は、14 世紀初めにペルシアの政治家、歴史家ラシード・ウッディン（Rashīd al-Dīn Fadl Allah1247-1318）がイリ汗国ガ　ン・ハーン（[ǧāzān khān]合　汗、在位 1295-1304）とウルジェイト・スルタン（[aūlǰāitū ṣultān] 完者　　1304-16）の命　を受けて著わした歴史書『Jāmi‘ al-Tawārikh』である。中国語訳、日本語訳は『史　』で、四部からなっている。第一部は「蒙古史」（チンギス・ハーンの起源からイリ汗国カ　ン・ハーンまで）、第二部「ユーラシア各国史」（チュルク（　　）民族から中央アジア、中東、西アジア諸国の王統、歴史を記録し、モンゴルの西征とその後の　　）、第三部は「王族系統」（チンギス・ハーンからカ　ン・ハーンまでのモンゴルが建てた諸オルスにおける黄金家族の系統を記録したもので、中国正史でいえば、黄金家族の本紀である。）、第四部は「地理　」である。

[3] 中国語の文は「这　情　不应当　作是谎言和　　因为蒙古人自古以来有保持　对　自己的起源和世系　的记忆　的习惯　　由　他们那里没有教会和宗教　不能像其他　民族　那样地　　教会（　　）和宗教（　）通过　　教规的方　教导子女　所以　　要对出生的每　子女解释有关氏族（　□　□　□）和系谱（　　）的传说　这种规　　远为他们　蒙古人　所　　是现在他们对这种规　　是　重的」である。

[3] モンゴルの親　称号

	史集	読み	中国語	那木四来「親戚」辞典	華夷訳語	
八世		Baldang ebüge		[illegible]		バルダン・エブゲ
七世		O'ndö'r ebüge		[illegible]		ウンドゥル・エブゲ
六世		Qulan eb üge		[illegible]		ホラン・エブゲ
五世	不迭一兀古兀	būdeh aūkūū'		[illegible]		エルン・エブゲ
四世	不都禿	būdūtū	高祖	[illegible]	孛羅孩	ホルンツァ・エブゲ
三世	[額]隣赤克	elenčeg	曾祖父	[illegible]	額隣触克	エルンチ・エブゲ
二世	額不格	ebüge	祖父	[illegible]		エブゲ
一世	額赤格	Ečike	父親	[illegible]		エチゲ
祖先		ebu¨ ged degedüs	祖先	[illegible]	兀里ぉ古思	エブゲドゥ

[3] 17 世紀以降、モンゴル人の　によるモンゴル編年史が数多く編纂された。　書きによって書きうつされ、　族、ラマ　　、また草原の文人たちによって保存されてきた。現在よく知られているものには以　がある。

『アルタン・ハーン伝』　《　　》(16071611)

『ア　ラクチ史』、　　《　》(1677)

『ガンガイン・オルスハル』、　　《　　》(1725)

『蒙古世系　』、　　《　　》(1735)

『アルタン・クルド　ン・ミンガン・ケゲスト　・　チィク』　　《
　　》(1739)
『ボロル・エリケ』、《　　》(1774-75)
メルゲン・ゲゲン著『アルタン・トブチ』　　《　　(1765)、
『アルタン・トブチト・テウケ』(　　)
　《　》(1817)
タラングォド・フベリ『諸モンゴルの起源を記録した書』　《　　》(1873)

[3]　無名氏著アルタン・トブチを指している。本論では　林高四　が『蒙古黄金史』と訳した『アルタン・トブチ』を指している。

[4]　「ラドロフの歴史」は、1891 年、ロシアの学者ラドロフは、モンゴルのオルン([Orqon])地方にチュルク文　文などの　　を行った　に『シャラ・トージ』の本を　　したが、ロシア東洋学研究所　ンクトペテルブルグの支部に保存されている。これが『シャラ・トージ』の A 本と呼ばれる　本であり、通常『ラドロフの歴史』あるいは『ラドロフ史』と呼ばれるものである。

[4]　この　論で発表された論文は以　の通りである。
　尓　　(アルディンフ)「蒙古史中「アルタン・オルグ」(黄金家族)」一　的来源和含義　－関　『蒙古秘史』中　　感生神話伝説新探之五」『民族研究』1996 年第三期。(「モンゴル史における「アルタン・オルグ」の一語の起源と意味　－「モンゴル秘史」におけるアランゴアが光を感じて　　したという神話に関する新たな探究その五」)
　「「アルタン・オルグ」(黄金家族)」一　的指称対象範　　－　特　　、　　日古両位　年同　」『民族研究』1997 年第四期(「アルタン・オルグ」一語の所記対象の範　　－テムル、シド　ルグ両　年同　に　える)。
　「関　「「アルタン・オルグ」(黄金家族)」一　的　生時間　－　特　　、　　日古両位　年同　」『黒　　民族　　』1997 年第四期(「「アルタン・オルグ」(黄金家族)」一語の発生時間に関して　－テムル、シド　ルグ両　年同　に　える)。
　「「元朝皇室」是「　　家族」的「同義　」么　　－　特　　等同　　」『蒙古学　息』2001 年第二期(「元朝皇室」は「ボルジ　ン氏族」の「同義語」か　　－テムル等の同　との　論)。
　「　「「アルタン・オルグ」(黄金家族)」　生時間和指称対象問題再　特　　等同　」(「「アルタン・オルグ」(黄金家族)」の発生時期と所記対象の問題について再びテムル等の同　に　える)。
　「　「数」字所指数　範　問題再　特　　等同　　－「「アルタン・オルグ」(黄金家族)」與「　　家族」　非「等同概　」」(「数」という文字の所記数　範　問題についてテムル等の同　に　える　－「「アルタン・オルグ」(黄金家族)」と「ボルジ　ン氏族」は決して「同等概　」ではない)。
　「関　這場　論之後的余論　－　　幾種提　和両類四条相関　料」(論　後の余論－いくつかの提言と二種類四個の相関資料を　　す)
特　　、　　日古「　論「「アルタン・オルグ」(黄金家族)」一　必　以史料為　　－與　尓　　教　　」『民族研究』1997 年第四期(「「「アルタン・オルグ」(黄金家族)」一語について論じるには資料を持って根　とすべき　－　尓　　教　との　論」)。
　「「「アルタン・オルグ」(黄金家族)」内　的　論與史学　範　－再與　尓　　先生　　」『中国辺　史地研究』1998 年第三期(「「「アルタン・オルグ」(黄金家族)」の

内含についての　論と史学　範について　－再び　尓　　教　と　論する)。

4　那珂通世の訳は「彼の民を　　五人にて　へて、　(　)　　家人(　)の　使住む(　)　処みに有付きたり。」(那珂通世　1907、p21)である。
明初訳本では「那其余百　、他　　五個、　　回来。因這般、　口［　　］　有、　　、使　的　有了。」と訳されている。
余大　訳本には、「　　五人　那　人　来、有了　　、　　、属民和　　。」と訳されている(余大　2001、　27)。

43 モンゴルのハブル・ハーンがアルタン・ハーンに「　　の　」に処された事　は、モンゴル史における大きな事　の一つである。「　　」とは、中国古代　　の一つであり、主に　乱の　をおこした女性に対して使った残　な　　である。『中国文明的秘　　』(李　　、百　文　出　社 2005)によると、　で作られた　　の四本の足に　輪が作られ、　輪に　が付けられている。　にした人間を　の　　に乗せ、　　を　して進めると　輪についた　が　せられた人間の　半　を徐々に　り付ける。『二十四史　義』によると、　半　から　された　き　が「自口　　出、常数日方　　」(口　のところから　き出て、数日後に　　する)して　　のであるという。
　このような　　をモンゴルのハーンに対して使ったことは、モンゴル人の　りをえたぎらせることになった。モンゴルとタタル人、アルタン・ハーン(金朝)の関係はさらに　張し、ハブル・ハーンの後継者である　トラ・ハーン(　[Qotala qaɣan])即位後、タタルに対し 13 回にわたる攻撃を行い、　　を　った。最終的には、チンギス・ハーン　子二代の対タタル　　を通して、個人としてシ　　トグ([Sikiqutuɣ])が確認できるが、タタル人は氏族　　として存在しなくなった。

44 ジャムハは、チンギス・ハーン　テムジンの　い　のアンダ(　[anda]　に　った　　)である。テムジンが三メル　トにブルデ・ウジン・ハトンを奪われたときに、ジャムハとトーリュル・ハーンが連軍を組　して、テムジンを　けてブルデ・ウジン・ハトンを取り　した。当時、テムジンとト　リュル・オン・ハーン二人でせいぜい二万人の　　を　めたにすぎなかったが、ジャムハは一人で二万人の軍　を有する草原の強力者であった(秘史 105 節)。三メル　トとの　いのあと、ジャムハとテムジンが属民を一つにして　を過ごしたが、　年の　に　　する　にジャムハの一言が原因で分かれた。　　中、ジャムハはテムジンに対し、「　　真安　、安　。　に　り　　せん。我等の　　どもは　房に有　かん。　に　り　　せん。我等の　　どもどもは　に有　かん」(那珂通世 1907、p107)と言った。テムジンのハトン(　人)ブルテ・ウジンはこのことばをわかれようという意味だと解釈した。明初訳本には「　毎　今　著　　、　　的　　房住。　著　　、　　的　　的　　的」と訳されている。元の言葉は、「　　」である。文字どおりに訳すと「テムジン・アンダよ、　の近くに　　しよう、　　いが家を建てるだろう。　に　って　　しよう、　　いが　を　やすいだろう」となる。この　について、ウラジミルツォフは「　い」は草原の　族(テムジン)を意味し、「　　い」は　民(ジャムハ)を意味するもので、テムジンとジャムハの間に起こった　　的対　を　　しているという(ウラジミルツォフ 1950)。しかし、テムジンが草原の　族であったのは、『モンゴル秘史』の世　においての話であり、現実の社会には、ジャムハの方がテムジンより　位にあった。三メル　トとの　いのあと、テムジンがジャムハと合　し、一　に　したほうがより安全であったのだ。
　この言葉は『秘史』において、テムジンとジャムハの分　の原因として有名である。

いろいろな解釈が多数あるが、この　の真の意味はいまだに解かれていない。しかし、何よりもその分　の結果、テムジンの勢力が一　にジャムハを上回る　的　　となった。テムジンは、その話が　れを告げることばであるというブリテ・ウジンの解釈を受け入れ、その日には日が　れても　　せず　　で進んでジャムはから　れた。　日に点　するともともとジャムハの部　であった 38 人 21 の氏族が所属のイルゲンを連れて、ジャムハを　れテムジンの配　に入った（『秘史』120 節）。そのときテムジンの配　に入ったシャーマン　言　　ルチがテムジンに　命が　けられたことをジャ　ルン・テンゲリの伝言として「皇（アマツカミ）　土（クニツカミ）　り合ひて、　真（ハカ）を国（ア）の主（テムジン）人（クニ）と為（ウシ）れと（ナ）ひ、国（イ）を乗せて持（クニ）ちて（モ）来たり」（那珂通世 1907、p112）と告げた。これにより、ジャムハの部　だった 8 フ　ーのイルゲンがテムジンの配　にきた。フ　ーは　　の　位であり、『秘史』129 節で、ジャムハとチンギス・ハーンの間の　　で、ジャムハが 13 の部から 3 万の軍　を組　したに対し、チンギス・ハーンの 13 フ　ーが 3 万の軍を編成している。フ　ーの　体的な　　は定まったものではなく、数百　から数千　であるとムンケ・ハーンの時代にイケ・モンゴル帝国を　れた　リスト教　リュブルックがその『東遊記』に記録している。

[4] [5]ワシーリィ・ウラディミロヴィチ・　ルトリド（Василий Владимирович Бартольд1869-1930）ロシアのチュルク学者、歴史家。中央アジア全般に　　研究を行い、中央アジアにおける遊牧世　の歴史の真相解明に大きな業績を残したと高く評価される学者であり、　　、中国などではウィル　ルム・　ルトリド（Wilhelm Barthold、　　尓　）と呼ばれている。　　（Kun）時代からモンゴル　権時代に至るまでの中央アジア遊牧民政権、特に大モンゴル帝国時代のモンゴル人によるロシアや西　への侵略について、その歴史的意義を改めて評価し、従来の野　な征服者としての認識に異を　えた。そのため　連国内でその著書が幾　も発行　　にされた。

[4]　ロシア・ブリヤード共和国のモンゴル学者ツェベン・ジャムツ　ラ　ー(Жамцарано.Ц)は、ラドロフ本の表　にある「ハルハ　吉ト　」は、ラドロフ本の持ち主だけではなく、著者でもあるとみている。モンゴル国の学者プルライは、「シャラ・トージ」に　場するイリドン・ドグ　グチ（ [Ildeng dügüregči]）の末子のシャム　ダラ・ツォクト・アゲイ（ [šambadara čoɣtu aɣai]）が『シャラ・トージ』の作者であるとみている。モンゴルの学者 Sh.　ラーはこの説を否定している。内モンゴルのウリジ(　力吉)は、オルドスのト　・ジ　ン（ [ordus-un tuva jinung]）が著者であるとみている。作者が確認できないだけに、編纂時期については、森　哲　は、18 世紀　くらいに編纂されたとみている。ドイツのハイシシヒは、1651-1662 年に書かれ、17 世紀末か 18 世紀初期に内　が　足され、編　が　えられたとみている。　連のシャスティナは 17 世紀の半ばから後半にかけて書かれたとみているし、またウリジは 1643-1662 の間に書かれたとしている。

[4]　ツェベン・ジャムツ　ラ　ーは、1721 年、　連のプチ　フス　、シャスティナとモンゴル国のプルライは 17 世紀の初　から後半、モンゴル国の Sh.　ラーは 17 世紀後半から 18 世紀の初　まで、また内モンゴルの　金　は 1628-1634 年、チョイジ（　吉）は 1655 年に書かれたとみている。